

3-1

教師の指導力と子どもの 総合学力の関係

Benesse 教育研究開発センター主任研究員 田中 勇作

はじめに

第2章では、今回の「学力向上のための基本調査2008」(以下、「基本調査2008」と称する)の結果を概観する形で、子どもたちの家庭学習の実態や、家庭学習と教科学力との関係、そして家庭学習充実に向けての教師、保護者、校長の働きかけの状況について、個別にその傾向や課題を見てきた。

本章では、第2章1節で述べた、「基本調査2008」における6つの作業仮説について、「子どもの教科学力や家庭学習力」と、「教師の家庭学習指導力」「保護者の家庭学習支援力」ならびに「校長の家庭学習充実に関する経営力」等とのクロス分析を通して検証し、「家庭学習充実に向けての総合的な取り組み」の在り方について若干の考察を加えていく。

まず、本節では作業仮説1「『教師の家庭学習指導力』が高いほど、その教師が担当する子どもの『家庭学習力』は高い」について探っていくこととする。

1 「教師の指導力(FAN)」と子どもの教科学力および家庭学習力との関係

第2章1節で述べたように、今回の「基本調査2008」では、学力向上における教師の総合的な取り組みを「教師の指導力(FAN)」「家庭学習指導力(Enrich)」および「授業連動力(Link)」という3つの観点から捉え、それら3つの力の総合的な発揮が子どもの総合学力の育成につながっているという基本仮説モデルのもとに調査を設計した(第2章1節の図表2-1-5参照)。

ここでは教師における3つの力の総合的な発揮状況と総合学力との関係を探る前に、それぞれの力との関係を見ることとし、まずは、先行する「基本調査2004」で提唱した「教師の指導力(FAN)」に関する教師の自己評価と、子どもたちの教科学力および「家庭学習力」の関係について概観したい。

図表3-1-1は、「教師の指導力(FAN)」に関する6つのカテゴリースコアの大きさによって、小学校教師を上位・中位・下位の3群に分類し、各群の教師が前年度担当した子どもたち(小5生)の教科学力スコア(国語・算数2教科の平均正答率を偏差値換算)ならびに家庭学習力スコアを示している。なお、家庭学習力スコアについ

ては、第2章3節で述べた33項目の回答について、「とてもあてはまる：4」「まああてはまる：3」「あまりあてはまらない：2」「まったくあてはまらない：1」として数値化し、子ども一人ひとりにおける全項目の平均スコアを算出したうえで、偏差値換算を行なっている。

教師の3群分類に際しては、「教師の指導力(FAN)」に関わる6つのカテゴリーに属する項目に対する教師各人の回答を上記に準じて数値化し偏差値換算した上で、偏差値40未満を下位群、40以上～60未満を中位群、60以上を上位群として3群に分類している。また、3群の構成比率はそれぞれ、およそ15%、70%、15%となっている。また、表中右欄の「上位-下位」の数値は上位群教師が前年度担当した子どもの教科学力スコアおよび家庭学習力スコアの平均から同じく下位群教師が前年度担当した子どものスコアの平均を引いた差異を示す。また、「検定」欄の記号は、その差異が統計的にどの程度有意であることを示し、「**」は危険率1%未満の水準で、「*」は同じく5%未満の水準で有意差が認められることを示している。また、参考のため、同じく10%未

満の水準で有意さが認められる項目は「+」で示した。

なお、後述する「家庭学習指導力(Enrich)」 「授業連動力(Link)」と子どもの教科学力スコア、家庭学習力スコアとの関係を見る場合もこれらに準ずる形をとっている。

さて、この図表からは、子どもの「教科学力」はどのカテゴリーについても、「上位群>中位群>下位群」となり、「学びの土台作り(F S)」を除いて上位群と下位群間にはいずれも大きな差異がみられ、「教師の指導力(F A N)」の6つのカ

テゴリーおよび総合スコアは子どもたちの教科学力育成に関わる有効な指標となっていることが改めて確認できる。

一方、家庭学習力との関係を見てみると、「上位群>中位群>下位群」となるのは「教師の指導力(F A N)総合スコア」の他、「プログラムの指導(A T)」 「学習ガイダンス(N S)」 「形成的評価と指導(N T)」のカテゴリーとなり、そのうち統計的に有意なものは「学習ガイダンス(N S)」のみとなっている。

図表 3-1-1 「教師の指導力(F A N)」カテゴリー別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係 (小学校)

教師の指導力 (F A N) カテゴリー	教師群 子どもスコア	F A N	F A N	F A N	上位-下位	検定
		下位群	中位群	上位群		
学びの土台作り(F S)	教 科学力	49.3	49.9	51.9	2.5	
	家庭学習力	48.6	50.9	48.7	0.1	
指導の土台作り(F T)	教 科学力	46.6	49.3	60.6	13.9	**
	家庭学習力	50.5	49.0	55.8	5.3	
プロジェクト的指導(A S)	教 科学力	47.1	50.3	55.6	8.5	+
	家庭学習力	49.4	50.8	45.2	-4.2	
プログラムの指導(A T)	教 科学力	46.6	49.6	55.3	8.8	+
	家庭学習力	48.4	49.3	54.7	6.2	
学習ガイダンス(N S)	教 科学力	44.9	49.6	60.2	15.3	**
	家庭学習力	45.8	49.2	61.0	15.3	**
形成的評価と指導(N T)	教 科学力	43.1	50.1	56.1	13.1	*
	家庭学習力	42.3	50.5	52.9	10.6	+
教師の指導力(F A N) 総合スコア	教 科学力	45.2	49.4	57.5	12.3	**
	家庭学習力	46.7	50.1	53.3	6.7	

注)表中「検定」欄の「**」は危険率1%未満の水準で、「*」は同じく5%未満の水準で有意差が認められることを示す。なお「+」は、同じく10%未満の水準で有意差が認められるものに参考としてつけている。(以下同様)

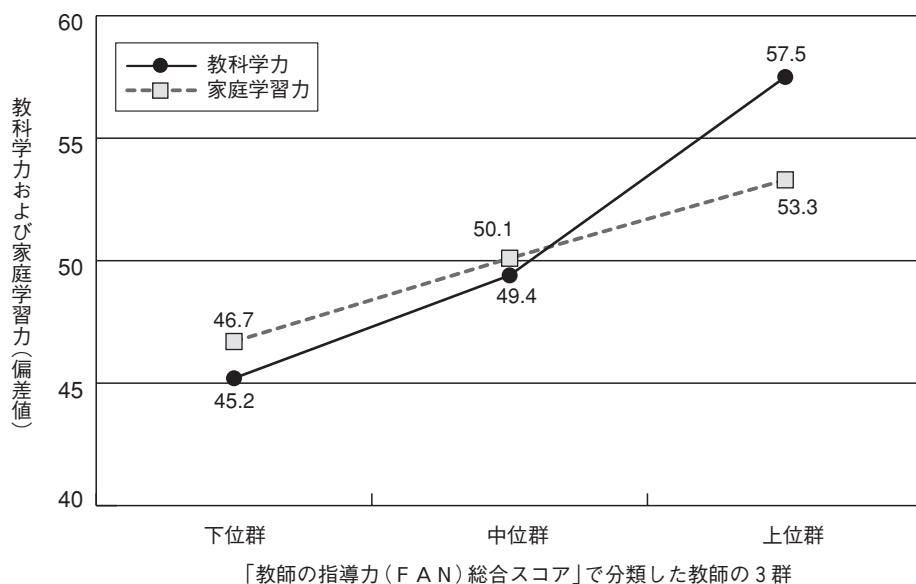
また「教師の指導力(F A N)総合スコア」と子どもの教科学力および家庭学習力の関係を図表 3-1-2 にグラフで示した。この図表からは、「F A N総合スコア」が高いほど教科学力および家庭学習力が高いという正の相関関係が読み取れるが、教科学力に比べると家庭学習力に関しては相関の度合いが弱いことが見て取れる。

これらの図表からは、「教師の指導力(F A N)」は子どもの家庭学習力の育成に関してもある程度は有効な指標となっているものの、必要十分な働きかけの指標にはなっていないことがわかる。言い換えると、家庭学習力の育成に関しては、総

論としての「教師の指導力(F A N)」をベースにしつつも、家庭学習の指導に焦点を絞り込んだより具体的な視点が必要であることを示唆する結果となっている。

なお、紙幅の関係上、中学校教師における「教師の指導力」と子ども(中2生)の教科学力、家庭学習力との関係についてのデータ掲載は割愛するが、教師の指導力総合スコアと教科学力、家庭学習力との間には正の相関関係は読み取れるものの、統計的に有意な差異は認められず、小学校ほど顕著な傾向は見られなかったことを付記しておく。

図表 3-1-2 「教師の指導力(FAN)」総合スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係(小学校)



注)図表 3-1-1 最下欄の「教師の指導力(FAN) 総合スコア」をグラフで示したものを。

2 「教師の家庭学習指導力(Enrich)」と子どもの教科学力および家庭学習力との関係

次に、「教師の家庭学習指導力」と子どもの教科学力、家庭学習力との関係について見てみよう。

1 「家庭学習の充実」に関わる教師の取り組み度合いによって、子どもの教科学力および家庭学習力に違いがみられる

今回の基本調査2008では家庭学習の充実に関わる教師の取り組み状況を示すと考えられる項目を、前述の「教師の指導力(FAN)」モデルの枠

組みを踏まえ、次の6つのカテゴリーに基づいて作成し、「教師の家庭学習指導力(Enrich)」モデルを構築している。

〈「教師の家庭学習指導力(Enrich)」モデルを構成する6つのカテゴリー〉

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| E 1 : 家庭学習の習慣化促進 | ← 「学びの土台作り(F S)」に対応 |
| E 2 : 自作教材やノート活用の工夫 | ← 「指導の土台作り(F T)」に対応 |
| E 3 : プロジェクト的課題の導入 | ← 「プロジェクト的指導(A S)」に対応 |
| E 4 : 基礎的指導の充実 | ← 「プログラムの指導(A T)」に対応 |
| E 5 : 家庭学習のガイダンス | ← 「学習ガイダンス(N S)」に対応 |
| E 6 : 家庭学習の点検・評価と指導 | ← 「形成的評価と指導(N T)」に対応 |

ここでは、これらの6つのカテゴリーにおける代表的な項目について、教師の回答状況と子どもたちの教科学力および家庭学習力の関係をみていく。図表 3-1-3 は、各項目に対する回答状況によって、小学校教師を肯定群(「とてもあてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答)と否

定群(「どちらかといえばあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答)に分け、それぞれの群に属する各教師が前年度担当した子どもの教科学力スコアならびに家庭学習力スコアを比較したものである。なお、教科学力スコアは国語・算数2教科の平均正答率を、家庭学習力スコアは前述し

た手順に準じて数値化した33項目の平均スコア(最高値4～最低値1となり、数値が大きいほど家庭学習力が高いことを示す)を用いている。また、「差異」の数値は肯定群教師が前年度担当した子どもの教科学力スコアおよび家庭学習力スコアの平均から同じく否定群教師が前年度担当した子どものスコアの平均を引いた差異を示し、「検定」欄の記号は、その差異が統計的にどの程度有意であるかを示し、「*」は危険率5%未満の水準で、「**」は同じく1%未満の水準で有意差が認められることを示している。また参考値として10%未満の水準で有意なものを「+」で示した。同じく「NA」は、一方のサンプル数が3件未満のため検定不能であることを示している。なお、2008年11月に刊行した「学力向上のための基本調査2008」中間報告書で示した図表の数値と異なっているのは、本報告書では教師と子どものクロスをより厳密に見るために、クロス集計の単位をクラス単位に変更したことによる。(以下同様)

さて、図表3-1-3に示すように、肯定群>否定群となる項目は、教科学力スコアではその差異が大きいものから順に「本や文章、資料を読み、自分の考えや意見、批評等を書かせて読解力を高めるような課題を宿題として出すようにしている(問6-10)」「毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるように指導している(問6-1)」「校内や教育センターの教材データベースやインターネット等からドリルや教材を入手し、宿題や家庭学習教材として活用している(問6-8)」をはじめ24項目中17項目となる。また、家庭学習力スコアに関しては24項目中18項目で肯定群の方がスコアが高くなっており、教科学力スコアおよび家庭学習力スコアともに肯定群>否定群となる項目は図表中の網掛けで示した16項目となっている。

ここでは両者の因果関係までは明らかにしていないが、家庭学習充実に関する様々な項目におい

て、教師の取り組みの有無が子どもたちの教科学力や家庭学習力の違いとして現れていると推察できる。また、モデルとして設定した6つのカテゴリーのうち、「E4:基礎的指導の充実」を除く5つの各カテゴリーで教科学力ならびに家庭学習力ともに2項目以上が肯定群>否定群となっており、家庭学習充実の関する取り組みはそうした複数の要素や機能から複合的になされることの必要性を示唆するものと考えられる。

さて、前述したように24項目中16項目で教科学力スコアおよび家庭学習力スコアともに肯定群>否定群となったが、もう少し詳しく見ると「校内や教育センターの教材データベースやインターネットサイト等からドリルや教材を入手し、宿題や家庭学習教材として活用している(問6-8)」のように教科学力スコアでは有意な差異があるが家庭学習力スコアではそうでない項目や、「家庭学習の成果に対する評価規準や判断基準を明確に示すとともに、成績にしっかりと反映させている(問6-24)」のようにその逆となる項目も存在する。また、「子どもたちの家庭学習への取り組みに対して色々な報奨の仕掛けを工夫する等してやる気を高めるようにしている(問6-23)」のように家庭学習力スコアでは有意に肯定群>否定群となるが、教科学力スコアでは否定群>肯定群となるなど同じ家庭学習充実に関する項目の中でも、影響を及ぼす対象やその度合いが異なっていることがわかる。このことについては後ほど改めて見ていくこととしたい。

なお、図表3-1-4には、中学校における家庭学習充実に関する教師の取り組み状況と子どもの教科学力スコアおよび家庭学習力スコアの関係性を小学校に準じて示した。

さて、小学校と中学校における網掛けをした教科学力スコアおよび家庭学習力スコアがともに肯定群>否定群となった項目に着目すると、以下のように分けることができる。

- | |
|--|
| <p>A) 小学校のみで見られる項目：問6-1、問6-2、問6-8、問6-10、問6-11、
問6-19、問6-24</p> <p>B) 中学校のみで見られる項目：問6-3、問6-6、問6-13、問6-15、問6-18</p> <p>C) 小・中学校ともに見られる項目：問6-4、問6-5、問6-9、問6-12、問6-16、
問6-17、問6-20、問6-21、問6-22</p> |
|--|

紙幅の関係でこれらすべての項目について詳しく見ていくことはできないが、たとえば前ページ下のA)に属する問6-11「家族や友人、地域の人たちとの対話や触れ合いを促すような課題や活動を宿題として出すようにしている」という項目は、小学校では教科学力・家庭学習力スコアともに肯定群>否定群となりその差異も有意となるが、中学校では両スコアともに否定群>肯定群となり、小・中学校において対照的な傾向を示している。逆にB)に属する問6-6「市販の教材やドリル等のみに頼らず、自作のプリントや課題等も宿題として出すようにしている」という項目は、中学校では教科学力・家庭学習力スコアともに肯定群>否定群となるが、小学校では両スコアとも

にも否定群>肯定群となり、小・中学校において対照的な傾向を示している。また、C)に属する問6-16「クラス共通の課題に加えて、子どもの理解状況や興味・関心等に応じた個別的な課題も宿題として用意している」は、小・中学校ともに「肯定群>否定群」となるものの、肯定群と否定群の差異は中学校の方が有意に高くなっている。

このように子どもの発達段階（あるいは校種）によっても家庭学習充実に関わる働きかけの影響度が異なる項目も見受けられる。言い換えれば、子どもの発達段階に応じて家庭学習充実に関わる働きかけの比重や方法を考慮する必要があるといえよう。

図表3-1-3 家庭学習充実に関する項目への教師の取り組み状況(肯定vs否定)と子どもの教科学力および家庭学習力との関係(小学校)

家庭学習指導力のカテゴリー	項目番号	項目内容	教師群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
E1 家庭学習の習慣化促進	問6-1	毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるように指導している。	肯定	72.1	6.8	*	2.80	0.16	*
			否定	65.3			2.64		
	問6-2	教師が指定図書のリストを作ったり、子ども自身に目標冊数を決めさせたりして、家庭での読書を習慣づけるように指導している。	肯定	71.9	0.8		2.80	0.02	
			否定	71.1			2.78		
	問6-3	教科の特性や子どもの年齢に応じて、自主的・主体的な家庭学習へと移行していけるように指導している。	肯定	71.3	-1.1		2.78	-0.06	
			否定	72.4			2.84		
	問6-4	毎日の家庭学習の計画の立て方や管理の仕方を指導したり、家庭学習の時間をうまく確保する工夫等を身につけさせたりしている。	肯定	71.8	0.7		2.80	0.04	
			否定	71.1			2.76		
E2 自作教材やノート活用の工夫	問6-5	授業で使うワークシートの使い方やノートのとり方を工夫し、家庭での予習復習やテスト勉強等にそれらを活用するように指導している。	肯定	72.1	2.0		2.80	0.04	
			否定	70.1			2.76		
	問6-6	市販の教材やドリル等のみに頼らず、自作のプリントや課題等も宿題として出すようにしている。	肯定	71.2	-1.8		2.79	-0.02	
			否定	73.0			2.80		
	問6-7	宿題の内容や量、方法等を教員間で協議したり、効果の高い教材を共同で開発して使用したりしている。	肯定	70.6	-2.0	*	2.77	-0.04	
			否定	72.6			2.81		
	問6-8	校内や教育センターの教材データベースやインターネットサイト等からドリルや教材を入手し、宿題や家庭学習教材として活用している。	肯定	75.6	5.7	**	2.79	0.01	
			否定	69.9			2.79		
E3 プロジェクト的課題の導入	問6-9	あるテーマについて調べたり、その結果や考えを表現させたりする課題や活動を宿題として出すようにしている。	肯定	73.2	3.8	*	2.83	0.09	*
			否定	69.5			2.74		
	問6-10	本や文章、資料を読み、自分の考えや意見、批評等を書かせて読解力を高めるような課題を宿題として出すようにしている。	肯定	76.4	7.0	**	2.87	0.11	*
			否定	69.4			2.75		
	問6-11	家族や友人、地域の人たちとの対話や触れ合いを促すような課題や活動を宿題として出すようにしている。	肯定	74.1	4.2	*	2.84	0.08	+
			否定	69.9			2.76		
問6-12	授業で学んだことをふだんの生活や自分のことに結び付けて、身の回りの問題や課題の解決にあたらせるような宿題を出すようにしている。	肯定	72.1	1.2		2.79	0.00		
		否定	70.9			2.79			

図表3-1-3 家庭学習充実に関する項目への教師の取り組み状況(肯定vs否定)と子どもの教科学力および家庭学習力との関係(小学校)(つづき)

家庭学習指導力の カテゴリー	項目 番号	項目 内容	教師 群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
E4 基礎的指導の充実	問6-13	量や頻度にムラがないように、宿題を出すようにしている。	肯定	71.3	-4.8	NA	2.78	-0.12	NA
			否定	76.1			2.90		
	問6-14	宿題をやってこない子どもや家庭学習が十分でない子どもに対しては、始業前や休み時間、放課後等にやらせるようにしている。	肯定	71.5	-0.7		2.79	-0.02	
			否定	72.2			2.81		
問6-15	長期休業中には、ふだんやりにくい課題や十分に習熟できていない課題等を優先的に出すようにしている。	肯定	71.5	-0.5		2.80	0.10		
		否定	72.0			2.70			
問6-16	クラス共通の課題に加えて、子どもの理解状況や興味・関心等に応じた個別的な課題も宿題として用意している。	肯定	72.3	1.7		2.81	0.04		
		否定	70.7			2.78			
E5 家庭学習のガイダンス	問6-17	保護者に対して、家庭学習の充実に向けての協力や応援が得られるよう、具体的な事例と共に説明している。	肯定	71.9	2.6		2.80	0.06	
			否定	69.4			2.75		
	問6-18	家庭学習教材として適切な教材や方法を保護者や子どもの要望に応じて紹介している。	肯定	71.5	0.3		2.78	-0.02	
			否定	71.2			2.80		
問6-19	家庭学習の意義や役割から、計画の立て方、具体的学習方法、評価規準等をまとめた「家庭学習の手引き」等を作成し、随時活用させている。	肯定	72.7	2.1		2.81	0.03		
		否定	70.6			2.78			
問6-20	子どもたちの家庭学習上の悩みや相談に個別に応じたり、具体的な方法やコツを指導したりしている。	肯定	71.6	1.3		2.81	0.10	+	
		否定	70.3			2.71			
E6 家庭学習の点検・評価と指導	問6-21	授業で用いたプリントやテスト、作品等と一緒に宿題や家庭学習の成果もポートフォリオとして管理させ、成長や課題を振り返らせている。	肯定	71.7	0.8		2.79	0.00	
			否定	70.9			2.79		
	問6-22	探究的課題など中長期的な宿題を出した後は、引っ掛かっている点の確認や指導、念押し等をして必ず提出させるように指導している。	肯定	71.7	1.0		2.80	0.16	+
			否定	70.8			2.64		
問6-23	子どもたちの家庭学習への取り組みに対して色々な報奨の仕掛けを工夫する等してやる気を高めるようにしている。	肯定	70.9	-1.9		2.80	0.05		
		否定	72.9			2.75			
問6-24	家庭学習の成果に対する評価規準や判断基準を明確に示すとともに、成績にしっかりと反映させている。	肯定	72.4	1.9		2.84	0.09	*	
		否定	70.5			2.75			

注)表中「検定」欄の「**」は危険率1%未満の水準で、「*」は同じく5%未満の水準で有意差が認められることを示す。なお「+」は、同じく10%未満の水準で有意差が認められるものに参考としてつけている。また「NA」は一方のサンプル数が3件未満のため検定ができないことを示す。網掛けは、教科学力および家庭学習力のスコアがともに肯定群>否定群となる項目を示している。(以下同様)

図表 3-1-4 家庭学習充実に関する項目への教師の取り組み状況(肯定vs否定)と子どもの教科学力および家庭学習力との関係(中学校)

家庭学習指導力のカテゴリー	項目番号	項目内容	教師群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
E1 家庭学習の習慣化促進	問6-1	毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるように指導している。	肯定	67.3	1.9		2.51	0.00	
			否定	65.4			2.51		
	問6-2	教師が指定図書のリストを作ったり、子ども自身に目標冊数を決めさせたりして、家庭での読書を習慣づけるように指導している。	肯定	—	—		—	—	
			否定	66.9			2.51		
問6-3	教科の特性や子どもの年齢に応じて、自主的・主体的な家庭学習へと移行していけるように指導している。	肯定	67.0	0.2		2.53	0.03		
		否定	66.7			2.50			
問6-4	毎日の家庭学習の計画の立て方や管理の仕方を指導したり、家庭学習の時間をうまく確保する工夫等を身につけさせたりしている。	肯定	68.5	4.0	+	2.54	0.06	+	
		否定	64.4			2.48			
E2 自作教材やノート活用の工夫	問6-5	授業で使うワークシートの使い方やノートのとり方を工夫し、家庭での予習復習やテスト勉強等に活用するように指導している。	肯定	66.8	-0.4		2.53	0.07	+
			否定	67.2			2.46		
	問6-6	市販の教材やドリル等のみに頼らず、自作のプリントや課題等も宿題として出すようにしている。	肯定	67.4	1.7		2.54	0.08	*
			否定	65.7			2.46		
問6-7	宿題の内容や量、方法等を教員間で協議したり、効果の高い教材を共同で開発して使用したりしている。	肯定	65.0	-1.9	NA	2.60	0.10	NA	
		否定	67.0			2.51			
問6-8	校内や教育センターの教材データベースやインターネットサイト等からドリルや教材を入手し、宿題や家庭学習教材として活用している。	肯定	66.7	-0.2		2.54	0.03		
		否定	66.9			2.51			
E3 プロジェクト的課題の導入	問6-9	あるテーマについて調べたり、その結果や考えを表現させたりする課題や活動を宿題として出すようにしている。	肯定	72.2	6.8	*	2.54	0.04	
			否定	65.4			2.51		
	問6-10	本や文章、資料を読み、自分の考えや意見、批評等を書かせて読解力を高めるような課題を宿題として出すようにしている。	肯定	65.0	-2.1		2.55	0.04	
			否定	67.1			2.51		
問6-11	家族や友人、地域の人たちとの対話や触れ合いを促すような課題や活動を宿題として出すようにしている。	肯定	64.0	-3.2		2.46	-0.06		
		否定	67.2			2.52			
問6-12	授業で学んだことをふだんの生活や自分のことに結び付けて、身の回りの問題や課題の解決にあたらせるような宿題を出すようにしている。	肯定	68.0	1.5		2.56	0.05		
		否定	66.6			2.50			
E4 基礎的指導の充実	問6-13	量や頻度にムラがないように、宿題を出すようにしている。	肯定	67.6	1.8		2.54	0.06	+
			否定	65.8			2.47		
	問6-14	宿題をやっこない子どもや家庭学習が十分でない子どもに対しては、始業前や休み時間、放課後等にやらせるようにしている。	肯定	66.7	-0.3		2.51	-0.02	
			否定	67.1			2.53		
問6-15	長期休業中には、ふだんやりにくい課題や十分に習熟できていない課題等を優先的に出すようにしている。	肯定	67.3	1.6		2.53	0.05		
		否定	65.7			2.48			
問6-16	クラス共通の課題に加えて、子どもの理解状況や興味・関心等に応じた個別的な課題も宿題として用意している。	肯定	72.2	5.8	*	2.66	0.15	*	
		否定	66.4			2.50			

図表3-1-4 家庭学習充実に関する項目への教師の取り組み状況(肯定vs否定)と子どもの教科学力および家庭学習力との関係(中学校)(つづき)

家庭学習指導力の カテゴリー	項目 番号	項目 内容	教師 群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
E5 家庭学習の ガイダンス	問6-17	保護者に対して、家庭学習の充実に向けての協 力や応援が得られるよう、具体的な事例と共に 説明している。	肯定	67.9	1.2		2.55	0.04	
			否定	66.6			2.51		
	問6-18	家庭学習教材として適切な教材や方法を保護者 や子どもの要望に応じて紹介している。	肯定	71.2	5.0	+	2.60	0.10	*
			否定	66.2			2.50		
	問6-19	家庭学習の意義や役割から、計画の立て方、具 体的学習方法、評価規準等をまとめた「家庭学 習の手引き」等を作成し、随時活用させている。	肯定	59.0	-8.5	*	2.46	-0.06	
			否定	67.5			2.52		
	問6-20	子どもたちの家庭学習上の悩みや相談に個別に 応じたり、具体的な方法やコツを指導したりし ている。	肯定	68.8	5.7	*	2.53	0.04	
			否定	63.1			2.49		
E6 家庭学習の 点検・評価と 指導	問6-21	授業で用いたプリントやテスト、作品等と一緒 に宿題や家庭学習の成果もポートフォリオとし て管理させ、成長や課題を振り返らせている。	肯定	68.5	2.4		2.57	0.08	*
			否定	66.1			2.49		
	問6-22	探究的課題など中長期的な宿題を出した後は、 引っ掛かっている点の確認や指導、念押し等 をして必ず提出させるように指導している。	肯定	74.2	9.2	**	2.59	0.10	*
			否定	64.9			2.49		
	問6-23	子どもたちの家庭学習への取り組みに対して色々 な報奨の仕掛けを工夫する等してやる気を高め るようにしている。	肯定	63.7	-4.7	*	2.50	-0.02	
			否定	68.3			2.52		
	問6-24	家庭学習の成果に対する評価規準や判断基準を 明確に示すとともに、成績にしっかりと反映さ せている。	肯定	66.3	-1.4		2.53	0.04	
			否定	67.7			2.49		

2 教師の家庭学習充実に関する取り組みに関する項目の再カテゴリー化について

以上、教師の家庭学習充実に関する取り組みは、単に「宿題を出す」という直截的なことだけではなく、色々な方法で子どもたちに家庭学習の習慣化を促したり、宿題の内容や方法のバリエーションを工夫したり、家庭学習の成果の点検や評価を行なうなど様々な観点からなされており、それぞれの取り組みによる子どもの教科学力や家庭学習力に及ぼす影響度の違いや子どもの発達段階による効用の違いについて確認してきた。

ただ、実際の指導場面を考えると、教師はこうした取り組みを一つひとつ単独で行なっているのではなく、子どもの状況や発達段階、目的などに応じて複数の取り組みを複合的・時系列的に行なっており、それらの総体が家庭学習の指導力として子どもの教科学力や家庭学習力に直接的・間接的に影響を及ぼしていると考えられる。また、そう考えると先に見たようなある一つの取り組みが子どもの発達段階によっては負の関連を示したり、教科学力と家庭学習力に対して異なる影響度を示したりすることにある程度の説明がつく。し

かし、全ての項目の組み合わせによる影響を分析したり、項目間の影響を考慮したりすることは現実的ではない。

そこで、今回の調査で設定した教師の家庭学習充実に関する24の取り組み項目に対する教師の回答状況を改めて因子分析にかけ、当初設定した6つのカテゴリーの妥当性を確認するとともに、各カテゴリー別のスコアやそれらの総合的スコアを算出することで、教師の家庭学習充実の取り組みをいくつかのパターンとしてモデル化し、子どもの教科学力や家庭学習力にどのような影響を及ぼしているのかを探ることとした。

詳細については割愛するが、問6の24項目に対する小中学校教員約1600名の回答を元に行なった因子分析の結果、「家庭学習の基本的指導(第1因子)」「プロジェクト的課題の導入(第2因子)」「家庭学習のガイダンス(第3因子)」「家庭学習の習慣化促進(第4因子)」「家庭学習の点検・評価と指導(第5因子)」および「家庭学習課題の整備・充実(第6因子)」という6つの因子が

抽出された。図表3-1-5はこれらの6つの因子に属する項目と、当初設定した6つのカテゴリーおよび下位領域との対応を示している。なお、各カテゴリー内の項目は、該当する因子の因子負荷量の降順に並び替えている。また、「クラス共通の課題に加えて、子どもの理解状況や興味・関心などに応じた個別的な課題も用意している(問6-16)」ならびに「子どもたちの家庭学習への取り組みに対して、色々な報奨の仕掛けを工夫するなどしてやる気を高めている(問6-23)」は因子負荷量の相対的な低さや各因子に属する項目との整合性の低さおよび小・中学校ともに教科学力・家庭学習力との間に有意な負の相関があることから除外した。また、これにより残りの22項目は小学校・中学校のどちらかで両スコアと正の相関を示すこととなったことを付記しておく。

図表3-1-5からも明らかなように、因子分

析の結果に基づき再構成された6つのカテゴリーおよびそれぞれの下位領域は、80%以上の精度で当初設定したカテゴリーおよび下位領域と対応することが確認できた。

以下、このようにして再構成した6つのカテゴリーとそれぞれの下位領域項目(計22項目)に対する回答について、「とてもあてはまる：4」「どちらかといえばあてはまる：3」「どちらかといえばあてはまらない：2」「まったくあてはまらない：1」としてスコア化し、各教師について22項目の合計スコアを算出したものを「家庭学習指導力(Enrich)総合スコア」として操作的に定義する。また、各カテゴリーに属する下位領域項目についても同様にスコア化し、各カテゴリーにおける該当項目の合計スコアを「カテゴリースコア」とする。

図表3-1-5 因子分析結果を踏まえた「家庭学習充実に関する項目」の再カテゴリー化

抽出された因子	項目内容	当初のカテゴリー・下位領域
因子1 家庭学習の 基本的指導 (E4)	⑬量や頻度にムラがないように、宿題を出すようにしている。	E4-① 定期的な出題
	⑭宿題をやってこない子どもや家庭学習が十分でない子どもに対しては、始業前や休み時間、放課後等にやらせるようにしている。	E4-② 放課後の補充指導
	⑯教師が指定図書のリストを作ったり、子ども自身に目標冊数を決めさせたりして、家庭での読書を習慣づけるように指導している。	E1-② 読書習慣
	⑮長期休業中には、ふだんやりにくい課題や十分に習熟できていない課題等を優先的に出すようにしている。	E4-③ 長期休暇中の対応
因子2 プロジェクトの 課題の導入 (E3)	⑫授業で学んだことをふだんの生活や自分に結び付けて、身の回りの問題や課題の解決にあたらせるような宿題を出すようにしている。	E3-④ 問題解決の実践
	⑨あるテーマについて調べたり、その結果や考えを表現させたりする課題や活動を宿題として出すようにしている。	E3-① 調べ表現する課題
	⑪家族や友人、地域の人たちとの対話や触れ合いを促すような課題や活動を出すようにしている。	E3-③ 対話を促す課題
	⑩本や文章、資料を読み、自分の考えや意見、批評等を書かせて読解力を高めるような課題を宿題として出すようにしている。	E3-② 読解力を育む課題
因子3 家庭学習の ガイダンス (E5)	⑱家庭学習教材として適切な教材や方法を保護者や子どもの要望に応じて紹介している。	E5-② 家庭学習教材の紹介
	⑰保護者に対して、家庭学習の充実に向けての協力や応援が得られるよう、具体的な事例と共に説明している。	E5-① 保護者への説明・依頼
	⑲家庭学習の意義や役割から、計画の立て方、具体的学習方法、評価規準等をまとめた「家庭学習の手引き」等を作成し、随時活用させている。	E5-③ 家庭学習の手引き活用
	⑳子どもたちの家庭学習上の悩みや相談に個別に応じたり、具体的な方法やコツを指導したりしている。	E5-④ 家庭学習の指南
因子4 家庭学習の 習慣化促進 (E1)	④毎日の家庭学習の計画の立て方や管理の仕方を指導したり、家庭学習の時間をうまく確保する工夫等を身につけさせたりしている。	E1-④ マネジメント力育成
	⑤授業で使うワークシートの使い方やノートのとり方を工夫し、家庭での予習復習やテスト勉強等に活用するように指導している。	E2-① ノート等の活用
	③教科の特性や子どもの年齢に応じて、自主的・主体的な家庭学習へと移行していけるように指導している。	E1-③ 生活習慣
	①毎日かならず今日の授業の振り返りや次の授業への準備をすること等を習慣づけるように指導している。	E1-① 学習習慣

図表3-1-5 因子分析結果を踏まえた「家庭学習充実に関する項目」の再カテゴリー化（つづき）

抽出された因子	項目内容	当初のカテゴリー・下位領域
因子5 家庭学習の点検・評価と指導 (E6)	②探究的課題など中長期的な宿題を出した後は、引っ掛かっている点の確認や指導、念押し等をして必ず提出させるように指導している。	E6-② 提出の促進
	①授業で用いたプリントやテスト、作品等と一緒に、宿題や家庭学習の成果もポートフォリオとして管理させ、成長や課題を振り返らせている。	E6-① ポートフォリオの活用
	④家庭学習の結果に対する評価基準や判断基準を明確に示すとともに、成績にしっかりと反映させている。	E6-④ 評価基準の明示
因子6 家庭学習課題の整備・充実 (E2)	⑥市販の教材やドリル等のみならず、自作のプリントや課題等も宿題として出すようにしている。	E2-② 自作教材の作成
	⑦宿題の内容や量、方法等を教員間で協議したり、効果の高い教材を共同で開発して使用したりしている。	E2-③ 教師間の連携・研究
	⑧校内や教育センターの教材データベースやインターネットサイト等からドリルや教材を入手し、宿題や家庭学習教材として活用している。	E2-④ ICTの活用

3 「家庭学習指導力(Enrich)」のカテゴリー別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力の関係について

前述の方法によって算出した教師の「家庭学習指導力(Enrich)」の各カテゴリースコアおよび総合スコアを元に、前述の「①教師の指導力(FAN)」の項に準ずる形で、小学校教師48名を上位群・中位群・下位群の3群に分け、各群に属する教師が前年度担当した子どもたちの教科学力スコアおよび家庭学習力スコア(いずれも偏差値換算)の平均を算出した結果を図表3-1-6に示した。

なお、2008年11月に刊行した「基本調査2008」中間報告書で示した「家庭学習指導力スコアと教科学力スコアとの関係」の図表と数値が異なっているが、本報告書では前掲の図表3-1-5に示した再構成化したカテゴリーをもとに22項目によるカテゴリースコアを算出し直すなど集計単位を変更したことによることを付記しておく(なお、中間報告の図表では教科学力との間に正の相関がある17項目をもとに当初のカテゴリーモデルに

図表3-1-6 「家庭学習指導力(Enrich)」カテゴリー別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係(小学校)

家庭学習指導力(Enrich)カテゴリー	教師群 子どもスコア	Enrich	Enrich	Enrich	上位-下位	検定
		下位群	中位群	上位群		
E1 家庭学習の習慣化促進	教科学力	45.8	48.9	55.6	9.8	+
	家庭学習力	42.3	48.8	57.3	15.0	*
E2 家庭学習課題の整備・充実	教科学力	52.4	47.2	55.8	3.5	
	家庭学習力	52.0	49.5	49.3	-2.7	
E3 プロジェクト的課題の導入	教科学力	45.4	48.9	54.5	9.1	*
	家庭学習力	50.1	48.6	53.3	3.2	
E4 家庭学習の基本的指導	教科学力	50.7	49.5	52.1	1.4	
	家庭学習力	49.2	49.5	54.3	5.1	
E5 家庭学習のガイダンス	教科学力	48.7	49.9	50.4	1.7	
	家庭学習力	47.0	51.5	44.1	-2.9	
E6 家庭学習の点検・評価と指導	教科学力	46.9	49.4	53.7	6.8	
	家庭学習力	46.4	49.3	57.5	11.1	*
家庭学習指導力(Enrich) 総合スコア	教科学力	47.5	49.8	52.9	5.5	
	家庭学習力	47.6	50.0	55.2	7.5	+

沿って集計している)。

この図表3-1-6からは、子どもの「教科学力」は「E2. 家庭学習課題の整備・充実」「E4. 家庭学習の基礎的指導」を除き、「上位群>中位群>下位群」となり、「E1. 家庭学習の習慣化促進」「E3. プロジェクト的課題の導入」では上位群と下位群間には大きな差異が認められる。

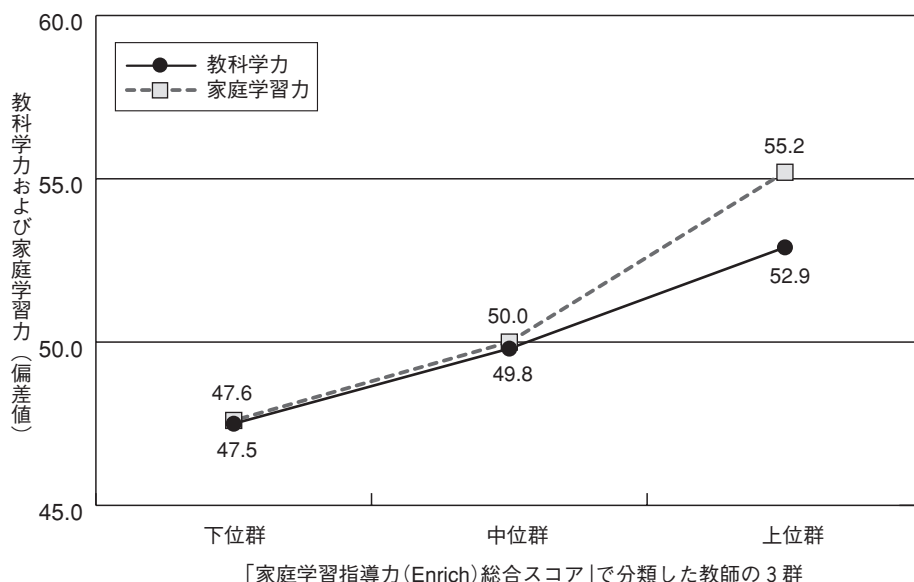
ただ、全体的に見ると、この「家庭学習指導力」スコアは前述の「教師の指導力(FAN)」に比べると、子どもたちの教科学力育成に関する指標としての妥当性は高いとはいえない。

一方、家庭学習力との関係を見てみると、「Enrich総合スコア」の他、「E1. 家庭学習の習慣化促進」「E4. 家庭学習の基礎的指導」「E6.

家庭学習の点検・評価と指導」の各カテゴリーで「上位群>中位群>下位群」となり、上位群と下位群間の差異も教科学力での差異に比べると大きくなる傾向が見られる。

また「家庭学習指導力(Enrich)総合スコア」と子どもの教科学力および家庭学習力の関係を図表3-1-7にグラフで示したが、この図表からは、「Enrich総合スコア」が高いほど教科学力および家庭学習力が高いという正の相関関係が読み取れる。さらに、若干ではあるが教科学力に比べると家庭学習力に関しては相関の度合いが強いことが見て取れる。ちなみに家庭学習力における上位群と下位群間の差の検定結果では危険率6%未満の水準で有意差が認められる。

図表3-1-7 「家庭学習指導力(Enrich)総合スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係(小学校)

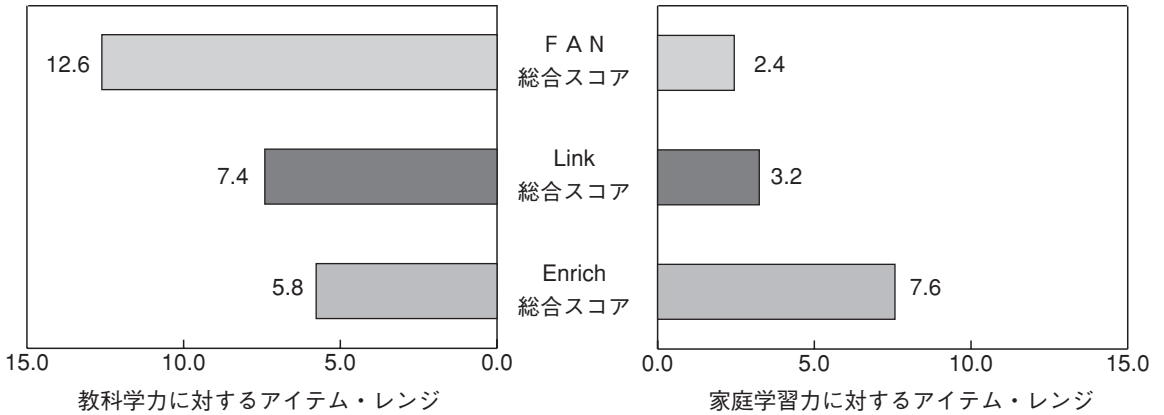


注) 図表3-1-6 最下欄の「家庭学習指導力(Enrich)総合スコア」をグラフで示したものを。

さて、**図表3-1-8**には、小学校における教科学力および家庭学習力を目的変数とし、「FAN総合スコア」「Enrich総合スコア」および「授業連動力総合スコア(Link)」を説明変数とした時の影響度合いを数量化I類という手法を用いて算出した結果(アイテム・レンジ)を示した。数量化I類についての詳細の説明は割愛するが、それぞ

れの説明変数におけるアイテム・レンジのスコアが大きいかほど目的変数に対する影響度は相対的に大きいとされている。**図表3-1-8**からは、教科学力については「FAN総合スコア」のアイテムレンジが、また家庭学習力については「Enrich総合スコア」のアイテムレンジがそれぞれ最も大きいことが読み取れる。

図表3-1-8 FAN・Link・Enrich各総合スコアと教科学力および家庭学習力との関係(小学校)



注) アイテム・レンジは、重回帰式： $Y(\text{目的変数}) = (a_1X_1 + a_2X_2 + \dots + a_nX_n) + (b_1Y_1 + b_2Y_2 + \dots + b_nY_n) + (\dots) + a_0$ (定数項)において、各アイテムの変数(説明変数)の係数の変動幅(例えば $a_1 \sim a_n$ の最大値と最小値の幅)を示し、目的変数(教科学力または家庭学習力)に対する各アイテムの影響の度合いを表す。アイテム・レンジの単位は目的変数のそれと同じである。

これらのことを勘案すると、小学校においては、前述の「FAN総合スコア」は子どもの教科学力向上に対する取り組みの指標として、また、「Enrich総合スコア」は子どもの家庭学習力育成に対する取り組みの指標として、それぞれ相対的により有効であると考えられよう。

ただ、中学校においては、**図表3-1-9**に示すように「家庭学習指導力」と教科学力との間にはある程度の正の相関関係が見られるものの、家庭学習力との間には明確な正の相関関係は見られなかった。小・中学校ともに教師個人におけるFAN総合スコアとEnrich総合スコア間にはともに比較的強い正の相関(0.65前後)を示しているが、今回のクロス集計に際しては、クロス集計の

単位を小学校では教師一人とクラスの子どもの平均とした一方、中学校の場合は複数教員の平均と学年の子ども全体の平均としたため、教員による取り組みのバラつきが大きく影響してくる。特に、中学校における各校のEnrich総合スコアのバラつき(分散)の平均はFAN総合スコアに比べて1.5倍程度に拡大し、教師(おそらく教科)によって「家庭学習の充実」に関する取り組みには大きな違いが見られる。一方、FAN総合スコアにおいては小学校における教師個人間のバラつきとさほど変わらない。推論の域を出ないが、そうした影響などが小・中学校における結果の違いにつながっている可能性は否定できず、調査設計の上からも今後の課題として残った。

図表 3-1-9 「家庭学習指導力(Enrich)」カテゴリ別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係(中学校)

家庭学習指導力 (Enrich) カテゴリ	教師群		Enrich 下位群	Enrich 中位群	Enrich 上位群	上位-下位	検定
	子どもスコア						
E 1 家庭学習の習慣化促進	教 科学力		48.7	49.0	56.7	8.0	
	家庭学習力		48.2	49.5	54.9	6.6	
E 2 家庭学習課題の整備・充実	教 科学力		44.5	50.5	49.2	4.7	
	家庭学習力		44.2	50.0	53.1	8.9	
E 3 プロジェクト的課題の導入	教 科学力		46.4	50.2	52.8	6.4	
	家庭学習力		54.3	47.8	60.2	5.9	
E 4 家庭学習の基礎的指導	教 科学力		45.5	50.4	50.1	4.6	
	家庭学習力		47.4	50.7	47.4	-0.1	
E 5 家庭学習のガイダンス	教 科学力		49.3	49.7	51.9	2.6	
	家庭学習力		55.8	46.8	57.9	2.1	
E 6 家庭学習の点検・評価と指導	教 科学力		45.4	50.2	54.7	9.3	
	家庭学習力		51.0	48.0	59.5	8.5	
家庭学習指導力(Enrich) 総合スコア	教 科学力		44.9	50.0	54.4	9.5	
	家庭学習力		53.5	47.5	58.5	4.9	

4 家庭学習力総合スコアと家庭学習指導力カテゴリースコアの関係について

以上、小学校においては教師の家庭学習指導力総合スコアが子どもの家庭学習力育成の有効な指標となりうることを見てきた。そこで、今度は逆に子どもの家庭学習力が高いクラスの教師は家庭学習の充実に関してどのような取り組みを行なっているのかを家庭学習指導力の6つのカテゴリーに沿って見てみよう。

図表3-1-10は、小学5年生の前年度のク

ラスにおける子どもの家庭学習力総合スコアの平均を算出した上で偏差値換算し、各クラスを上位群・中位群・下位群に分け、各群のクラスを前年度担当した教師の家庭学習指導力スコアをカテゴリー別に算出したものである。なお、各クラスの種類に際しては、クラスの家庭学習力総合スコアが60以上を上位群、40以上～60未満を中位群、40未満を下位群としている。

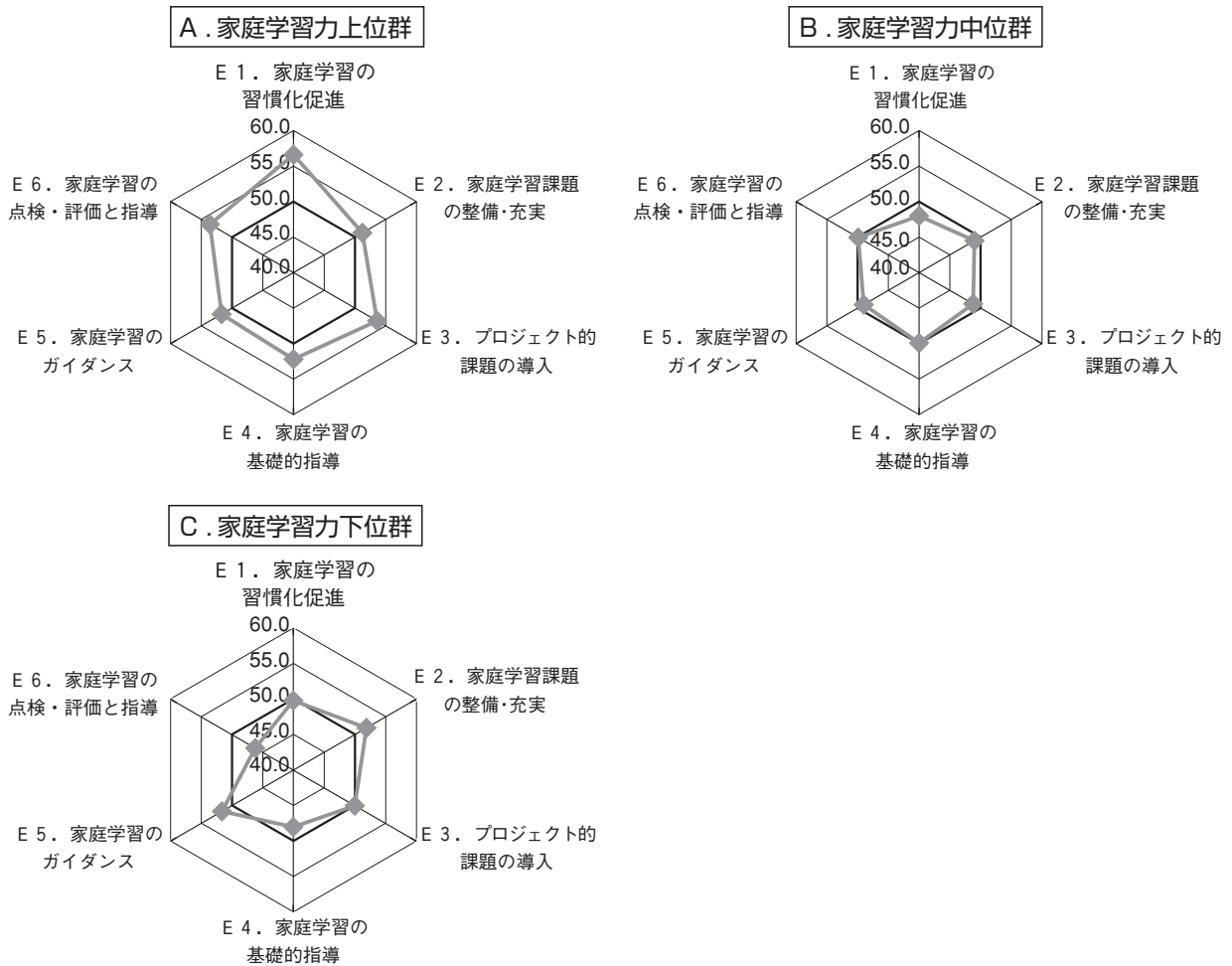
図表3-1-10 家庭学習力総合スコアと家庭学習指導力カテゴリースコアの関係（小学校）

家庭学習指導力 カテゴリー	A.家庭学習力 上位群	B.家庭学習力 中位群	C.家庭学習力 下位群	上位-下位
E 1 家庭学習の習慣化促進	56.6	48.0	49.8	6.8
E 2 家庭学習課題の整備・充実	51.2	49.0	51.9	-0.7
E 3 プロジェクト的課題の導入	53.6	48.8	50.0	3.7
E 4 家庭学習の基礎的指導	52.2	49.9	48.0	4.2
E 5 家庭学習のガイダンス	51.7	49.0	51.6	0.2
E 6 家庭学習の点検・評価と指導	53.6	49.9	46.2	7.4
Enrich 総合スコア	55.2	48.5	49.2	6.0

図表を見ると、明らかに家庭学習力の高いクラスでは教師の家庭学習指導力スコアが高くなっていることがわかり、Enrich 総合スコアで見ると上位群と中位群、下位群のそれぞれの差異は統計的に有意な差異が見られる。ただ、多くのカテゴリーで中位群と下位群の順序が入れ替わっており、必ずしも上位群>中位群>下位群という関係は見られない。

次に、これらの各カテゴリー別スコアの状況を視覚的に捉えられるように、図表3-1-11に各群のレーダーチャートを示した。なお、スコアは偏差値換算されているため、50を基準として、各カテゴリースコアが50より大きい場合は相対的な「強み」、小さい場合は「弱み」として判断できる。

図表 3-1-11 各群における家庭学習指導力カテゴリースコアのレーダーチャート（小学校）



まず、A. 家庭学習力上位群について見てみると、全てのカテゴリーにおいて基準値50を超えており、6つのカテゴリーに関する取り組みがバランスよくなされていることが読み取れる。

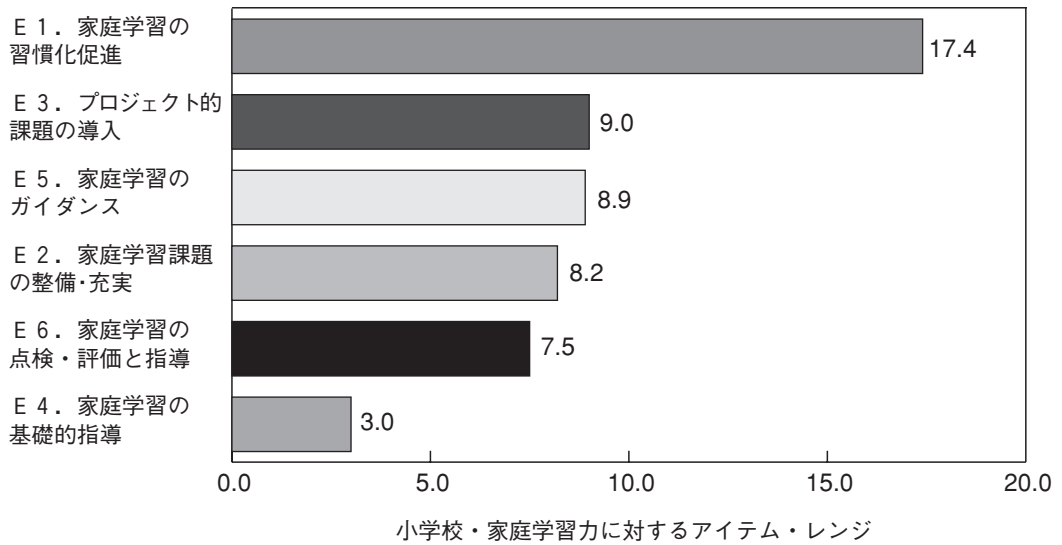
次に、B. 家庭学習力中位群を見ると、全てのカテゴリーにおいて基準値50を若干ながら下回っているが、ほぼ平均レベルとなっており、大きなバランスの崩れがない点が特徴といえる。ただ、相対的に「E 1. 家庭学習の習慣化促進」の取り組みが低くなっており、弱みと考えられる。

そこで、子どもの家庭学習力総合スコアを目的変数とし、教師の家庭学習指導力の6つのカテゴリースコアを説明変数として、先に紹介した数量化Ⅰ類によってアイテムレンジを算出した結果を図表 3-1-12 に示した。小学校の場合、子どもの家庭学習力に対して最も影響が大きいのは実はこの「E 1. 家庭学習の習慣化促進」となり、

他のカテゴリーに比べてその影響度は2倍以上となっている。中位群においては、まずこのカテゴリーに関する取り組みを強化することが優先課題だといえよう。

最後にC. 家庭学習力下位群を見ると、「E 2. 家庭学習課題の整備・充実」「E 5. 家庭学習のガイダンス」では上位群に勝るとも劣らぬようなスコアとなっている一方で、「E 6. 家庭学習の点検・評価と指導」に関しては3群中最も低く、上位群>中位群>下位群となり、上位群と下位群間の差異は統計的にも有意となっている。また、「E 4. 家庭学習の基礎的指導」に関しても上位群>中位群>下位群となり、カテゴリーによって偏りのあるバランスの悪い取り組みとなっている状況が読み取れる。下位群においては家庭学習の課題を与えるだけでなく、その後のフォローをきちんと行なっていくことが今後の課題であろう。

図表3-1-12 家庭学習力総合スコアに対する家庭学習指導力カテゴリーの影響度(小学校)



以上、教師の家庭学習指導力と子どもの家庭学習力の関係について、いくつかの観点から探ってきたが、今回の調査において小学校に関しては「『教師の家庭学習指導力』が高いほど、その教師が担当する子どもの『家庭学習力』は高い」という作業仮説1はほぼ検証できたと考える。また、教師の家庭学習指導力は当初設定した構造モデルとほぼ同様の6カテゴリーから構成され、各カテゴ

リーに関する取り組みをバランスよく行なうことで子どもの家庭学習力が育成されることも見出された。なお、前掲の図表3-1-5に示した家庭学習充実に関する22項目を用い、前述のようなレーダーチャートを作成することで、教師の家庭学習指導力の自己評価にも使っていける目処が立ったことを併せて報告しておく。

3 「授業と家庭学習との連動力(Link)」と子どもの教科学力および家庭学習力との関係

以上、「教師の指導力(FAN)」および「家庭学習指導力(Enrich)」の2つの観点から、子どもの教科学力や家庭学習力の育成との関係を探ってきた。その結果「教師の指導力(FAN)」と「家庭学習指導力(Enrich)」との間には比較的強い正の相関関係が認められ、共に子どもの教科学力や家庭学習力に対して正の関連を示すことが確認できた。しかし、その一方で、「教師の指導力(FAN)」は教科学力に、「家庭学習指導力(Enrich)」は家庭学習力に対して、それぞれ相対的により強

い影響を及ぼしていることも確認できた。

さて、今回の「基本調査2008」ではこうした教師の2つの働きかけに加え、両者をつなぎ、両者の機能・効用を一層強化するものとして「授業と家庭学習との連動力(Link)」(以下「授業連動力(Link)」とする)という概念を導入した。ここでは、「授業連動力(Link)」と子どもの教科学力および家庭学習力との関連について見ていくこととする。

1 授業と家庭学習をつなぐ教師の取り組み度合いによって、子どもの教科学力および家庭学習力にちがいがみられる

今回の「基本調査2008」では授業と家庭学習の連動に関わる教師の取り組み状況を示すと考えら

れる項目を、次の4つのカテゴリー(ねらい)を想定し、「授業連動力(Link)」モデルを構築している。

〈「授業連動力(Link)」モデルを構成する4つのカテゴリー〉

- L 1：家庭での予習を前提とすることで授業への参画意識を高め、授業密度を高める
- L 2：家庭学習を通じて、授業内容の一層の定着・習熟を図る
- L 3：応用発展的な家庭学習課題を通じて、授業内容の一層の深化・拡大を図る
- L 4：自主的・継続的な家庭学習の遂行を通して、主体的学習習慣の形成を図る

ここでは、これらの4つのカテゴリーにおける代表的な項目について、教師の回答状況と子どもたちの教科学力および家庭学習力の関係をみていく。図表3-1-13は、前述の「家庭学習充実に関する項目」に関する図表に準ずる形で、各項目に対する回答状況によって、小学校教師を肯定群と否定群に分け、それぞれの群に属する各教師が前年度担当した子どもの教科学力スコアならびに家庭学習力スコアを比較したものである。

なお、「基本調査2008」中間報告書で示した図表と数値が異なるのは、前述したようにクロス集計の単位を変更したことによる。

さて、図表3-1-13に示すように、肯定群>否定群となる項目は、教科学力スコアではその差異が大きいものから順に「調べ学習に関わる色々な手法や手順、ICTの活用等を授業で指導し、それをを用いて行う宿題(家庭学習課題)を出

している(問10-10)」「家庭での調べ学習や自由研究を行う際の見通しの立て方やスケジュールの管理の仕方を適宜指導している(問10-9)」「家庭学習として取り組ませている新聞の社説や記事、コラム等のまとめや感想を、朝の会や授業等で発表させている(問10-14)」をはじめ、全16項目中15項目にのぼる。また、家庭学習力スコアに関しては16項目中12項目で肯定群の方がスコアが高くなっており、教科学力スコアおよび家庭学習力スコアともに肯定群>否定群となる項目は図表中の網掛けで示した11項目で全体の約3/4を占める。

ここでも両者の因果関係までは明らかにしていないが、授業と家庭学習の連動に関する様々な項目において、教師の取り組みの有無が子どもたちの教科学力や家庭学習力の違いとして現れていることが推察できる。

図表3-1-13 授業と家庭学習の連動に関する項目への教師の取り組み状況(肯定vs否定)と子どもの教科学力および家庭学習力との関係(小学校)

授業運動力の カテゴリー	項目 番号	項目内容	教師 群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
授業密度の 向上を図る	問10-1	次の授業で学ぶ教科書の内容を読んだり、語句の意味を調べたり、関連する資料を調べておく等、予習する事柄と方法を明確に伝えている。	肯定	71.7	0.7		2.78	-0.02	
			否定	71.0			2.80		
	問10-2	授業計画の中で、授業内容が深まり子どもの積極的な参画を引き出すような予習の内容や方法を構想している。	肯定	72.1	1.0		2.81	0.04	
			否定	71.1			2.77		
	問10-3	予習してきた内容やその際に抱いた疑問を授業の中で発表、意見交換させるなどして、学習指導の充実を図っている。	肯定	73.1	3.2	*	2.82	0.06	
			否定	69.9			2.76		
	問10-4	予習ノート等を提出させて点検したり、子ども同士で確認させたりして、宿題を出しっぱなしにしないようにしている。	肯定	71.5	0.2		2.78	-0.03	
			否定	71.3			2.81		
家庭学習を通じ 授業内容の定着 習熟を図る	問10-5	間違いやすい問題やテストによく出る問題等を精選・体系化した宿題を出している。	肯定	71.7	0.5		2.78	-0.01	
			否定	71.2			2.79		
	問10-6	自分で問題を作るような宿題を出し、授業中に子どもに出題・解説させる等家庭学習のやりがいを高めている。	肯定	72.4	1.4		2.80	0.02	
			否定	71.0			2.78		
	問10-7	宿題の確認・点検シート等を用意し、保護者の関与を得られやすくしている。	肯定	71.8	0.6		2.85	0.12	**
			否定	71.2			2.73		
	問10-8	授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストをして、つまづき箇所の発見と解消に努めている。	肯定	72.4	4.5	*	2.81	0.10	+
			否定	67.9			2.71		
応用発展的な家庭学習課題により、 学習内容の深化・拡大を図る	問10-9	家庭での調べ学習や自由研究を行う際の見通しの立て方やスケジュール管理の仕方を適宜指導している。	肯定	74.1	5.0	**	2.85	0.12	*
			否定	69.1			2.73		
	問10-10	調べ学習に関わる色々な手法や手順、ICTの活用等を授業で指導し、それを用いて行う宿題(家庭学習課題)を出している。	肯定	76.2	6.2	**	2.87	0.11	*
			否定	70.0			2.76		
	問10-11	家庭学習として取り組んできた探究的学習の成果を発表したり、交流したりする場や機会を定期的に設けている。	肯定	71.9	0.5		2.74	-0.07	
			否定	71.4			2.81		
	問10-12	授業で学んだ知識やスキルを実生活において応用・活用させるような宿題を出している。	肯定	72.3	2.3		2.83	0.08	+
			否定	70.0			2.75		
主体的・継続的な家庭学習を通して、 学習習慣の形成を図る	問10-13	新聞や書籍、インターネット等を使って、色々な出来事やテーマについての情報を収集したり、まとめたりする宿題を出している。	肯定	73.9	3.9	*	2.82	0.05	
			否定	70.0			2.77		
	問10-14	家庭学習として取り組ませている新聞の社説や記事、コラム等のまとめや感想を、朝の会や授業等で発表させている。	肯定	74.3	4.7	**	2.83	0.07	
			否定	69.6			2.76		
	問10-15	漢字や計算、英語等の自主的・継続的な家庭学習の成果を検定試験等で確かめてみることを推奨している。	肯定	70.6	-1.5		2.85	0.10	*
			否定	72.1			2.75		
	問10-16	子どもの習熟状況や要望に応じた宿題を用意したり、家庭学習の仕方や教材を個別に紹介したりしている。	肯定	73.1	2.8	+	2.80	0.02	
			否定	70.3			2.78		

また、Linkモデルとして設定した4つのカテゴリー全てにおいて、教科学力ならびに家庭学習ともに2ないし3項目で肯定群>否定群となっており、授業と家庭学習の連動に関する取り組みに

おいてはこうした複数のねらいや機能から複合的になされることが重要であることを示唆するものと考えられる。

なお、図表3-1-14には、同じく中学校に
おける授業と家庭学習の連動の取り組み状況と子

どもの教科学力スコアおよび家庭学習力スコアの
関係を小学校に準じて示した。

図表3-1-14 授業と家庭学習の連動に関する項目への教師の取り組み状況(肯定vs否定)と子どもの教科学力
および家庭学習力との関係(中学校)

授業連動力の カテゴリー	項目 番号	項目 内容	教師 群	教科学力			家庭学習力		
				平均	差異	検定	平均	差異	検定
授業密度の 向上を図る 予習を前提に 授業参画意識や 授業参画意識 を図る	問10-1	次の授業で学ぶ教科書の内容を読んだり、語句の意味を調べたり、関連する資料を調べておく等、予習する事柄と方法を明確に伝えている。	肯定	66.2	-1.0		2.58	0.10	*
			否定	67.2			2.48		
	問10-2	授業計画の中で、授業内容が深まり子どもの積極的な参画を引き出すような予習の内容や方法を構想している。	肯定	65.8	-1.5		2.56	0.06	+
			否定	67.3			2.50		
	問10-3	予習してきた内容やその際に抱いた疑問を授業の中で発表、意見交換させるなどして、学習指導の充実を図っている。	肯定	64.0	-3.4		2.51	-0.01	
			否定	67.4			2.52		
	問10-4	予習ノート等を提出させて点検したり、子ども同士で確認させたりして、宿題を出しっぱなしにしないようにしている。	肯定	66.3	-0.8		2.55	0.05	
			否定	67.1			2.50		
家庭学習を通じ 授業内容の定着 を図る	問10-5	間違いやすい問題やテストによく出る問題等を精選・体系化した宿題を出している。	肯定	67.6	1.2		2.53	0.02	
			否定	66.4			2.51		
	問10-6	自分で問題を作るような宿題を出し、授業中に子どもに出題・解説させる等家庭学習のやりがいを高めている。	肯定	75.9	9.3	NA	2.69	0.18	NA
			否定	66.6			2.51		
	問10-7	宿題の確認・点検シート等を用意し、保護者の関与を得られやすくしている。	肯定	58.2	-9.1	NA	2.36	-0.16	NA
			否定	67.3			2.52		
	問10-8	授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストをして、つまづき箇所の発見と解消に努めている。	肯定	68.1	2.8		2.53	0.04	
			否定	65.3			2.49		
応用発展的な 家庭学習課題により、 家庭学習の深化・ 拡大を図る	問10-9	家庭での調べ学習や自由研究を行う際の見通しの立て方やスケジュール管理の仕方を適宜指導している。	肯定	72.3	6.1	+	2.62	0.12	*
			否定	66.2			2.50		
	問10-10	調べ学習に関わる色々な手法や手順、ICTの活用等を授業で指導し、それを用いて行う宿題(家庭学習課題)を出している。	肯定	66.2	-0.7	NA	2.62	0.11	NA
			否定	66.9			2.51		
	問10-11	家庭学習として取り組んできた探究的学習の成果を発表したり、交流したりする場や機会を定期的に設けている。	肯定	69.2	2.5		2.54	0.03	
			否定	66.7			2.51		
	問10-12	授業で学んだ知識やスキルを実生活において応用・活用させるような宿題を出している。	肯定	67.5	0.7		2.54	0.03	
			否定	66.8			2.51		
主体的・継続的 な家庭学習を通して、 主体的学習習慣の 形成を図る	問10-13	新聞や書籍、インターネット等を使って、色々な出来事やテーマについての情報を収集したり、まとめたりする宿題を出している。	肯定	72.7	6.3	+	2.60	0.09	
			否定	66.4			2.51		
	問10-14	家庭学習として取り組ませている新聞の社説や記事、コラム等のまとめや感想を、朝の会や授業等で発表させている。	肯定	69.5	2.7	NA	2.59	0.08	NA
			否定	66.8			2.51		
	問10-15	漢字や計算、英語等の主体的・継続的な家庭学習の成果を検定試験等で確かめてみることを推奨している。	肯定	67.3	0.8		2.52	0.01	
			否定	66.5			2.51		
	問10-16	子どもの習熟状況や要望に応じた宿題を用意したり、家庭学習の仕方や教材を個別に紹介したりしている。	肯定	64.8	-2.2		2.51	0.00	
			否定	67.0			2.51		

さて、先に見た家庭学習の充実の取り組みに準じて、小学校、中学校それぞれにおける網掛けをした教科学力スコアおよび家庭学習力スコアがと

もに肯定群>否定群となった項目に着目すると、以下のように分けることができる。

- A) 小学校のみで見られる項目：問10-2、問10-3、問10-7、問10-10、
問10-16
- B) 中学校のみで見られる項目：問10-5、問10-11、問10-15
- C) 小・中学校ともに見られる項目：問10-6、問10-8、問10-9、問10-12、
問10-13、問10-14

いくつか特徴的な項目について見てみると、たとえばA)に属する問10-7「宿題の確認・点検シート等を用意し、保護者の関与を得られ易くしている」という項目では、小学校では教科学力・家庭学習力スコアともに肯定群>否定群となりその有効性がうかがえるが、中学校では両スコアともに否定群>肯定群となりその差異も大きくなるなど、小・中学校において対照的な傾向を示している。ただ、この結果から、中学校においては、こうした保護者の関与を促す取り組みが子どもの教科学力や家庭学習力を低下させると判断する教師は恐らくいまい。むしろ、学力向上に向けて、教科学力や家庭学習力が芳しくない状況に対して、教師は保護者の一層の関与を促していこうとして

いると解釈するのが妥当ではないだろうか。

また、C)に属する問10-9「家庭での調べ学習や自由研究を行う際の見通しの立て方やスケジュール管理の仕方を適宜指導している」という項目は、小・中学校ともに教科学力スコアは肯定群>否定群となり、統計的に有意な差を示しており、子どもの教科学力向上に関わる影響度はともに大きい。

このように子どもの発達段階(あるいは校種)によっても授業と家庭学習の連動に関する取り組みの影響度が異なる項目も見受けられ、子どもの発達段階に応じてその取り組みの比重や方法を考慮する必要があることを示唆しているといえよう。

2 授業と家庭学習の連動に関する取り組み項目のカテゴリー構造の確認について

以上、授業と家庭学習の連動に関する取り組みは、「予習による授業密度の向上」や「宿題の点検・確認」、「応用・活用的宿題の導入」および「自主的家庭学習の推奨」といったキーワードに代表される複数のねらいや観点からなされていることが確認でき、同じ取り組みであっても子どもの発達段階によってその効用に違いがあることも確認された。

そこで、先の「家庭学習充実の取り組み」で行

なったと同様の手順に従って、授業と家庭学習の連動に関する16の取り組み項目を因子分析にかけ、当初設定した4つのカテゴリーの妥当性を確認するとともに、各カテゴリー別のスコアやそれらの総合的スコアを算出することで、授業と家庭学習の連動の取り組みをいくつかのパターンとしてモデル化し、子どもの教科学力や家庭学習力にどのような影響を及ぼしているのかを探ることとした。

紙幅の関係上、詳細については割愛するが、問10の16項目に対する小・中学校教員約1600名の回答を元に行なった因子分析の結果からは、改めて「L1. 予習を前提とした授業密度の向上」「L2. 宿題の点検・確認による授業内容の定着促進」「L3. 応用活用的宿題による授業の深化・拡大」および「L4. 自主的学習の推奨による主体的学習習慣の形成」といった当初モデルで設定した4つのカテゴリーを再確認することができた。また、項目レベルでも8割以上の一致率となったことなども勘案し、今回は当初モデルをそのまま適用することとした。

図表3-1-15では、再確認された4つのカ

テゴリーに属する項目と下位領域との対応を示している。なお、各カテゴリー内の項目は、該当する因子の因子負荷量の降順に並び替えている。

以下、このようにして再確認された4つのカテゴリーとそれぞれの下位領域項目(計16項目)に対する回答について、先に示した「家庭学習充実に関する取り組み」に準ずる形で、各教師について16項目の合計スコアを算出したものを「授業連動力(Link)総合スコア」として操作的に定義する。また、各カテゴリーに属する下位領域項目についても同様にスコア化し、各カテゴリーにおける該当項目の合計スコアを「カテゴリースコア」とする。

図表3-1-15 因子分析結果を踏まえた「授業と家庭学習の連動に関する項目」のカテゴリーの再確認

抽出された因子	項目内容	当初のカテゴリー・下位領域
因子1 予習を前提とした 授業密度の向上 (L1)	②授業計画の中で、授業内容が深まり子どもの積極的な参画を引き出すような予習の内容や方法を構想している。	L1-② 授業計画における予習の精練化
	①次の授業で学ぶ教科書の内容を読んだり、語句の意味を調べたり、関連する資料を調べておく等、予習する事柄と方法を明確に伝えている。	L1-① 予習事項や方法の明確な指示
	③予習してきた内容やその際に抱いた疑問を授業の中で発表、意見交換させるなどして、学習指導の充実を図っている。	L1-③ 予習を活かした授業効率・密度向上
	④予習ノート等を提出させて点検したり、子ども同士で確認させたりして、宿題を出しっぱなしにしないようにしている。	L1-④ 長期休暇中の対応
因子2 応用活用的宿題 による授業の 深化・拡大 (L3)	⑪家庭学習として取り組んできた探究的学習の成果を発表したり、交流したりする場や機会を定期的に設けている。	L3-③ 家庭学習の成果の披露と交流活動
	⑩調べ学習に関わる色々な手法や手順、ICTの活用等を授業で指導し、それを用いて行う宿題(家庭学習課題)を出している。	L3-② 調べ学習に関わるスキルの体系的指導
	⑫授業で学んだ知識やスキルを実生活において応用・活用させるような宿題を出している。	L3-④ 授業で学んだことの実生活での応用
	⑨家庭での調べ学習や自由研究を行う際の見通しの立て方やスケジュール管理の仕方を適宜指導している。	L3-① 家庭学習遂行への指導と支援
因子3 宿題の点検・確認 による授業内容 の定着促進 (L2)	⑧授業中に宿題の答え合わせや宿題内容に沿った確認テストをして、つまづき箇所の発見と解消に努めている。	L2-④ 家庭学習課題への指導と評価の一体化
	⑤間違いやすい問題やテストによくでる問題等を精選・体系化した宿題を出している。	L2-① 授業・教材研究と自作課題の開発
	⑦宿題の確認・点検シート等を用意し、保護者の関与を得られ易くしている。	L2-③ 保護者の関与促進へのしかけ作り
	⑥自分で問題を作るような宿題を出し、授業中に子どもに出題・解説させる等家庭学習のやりがいを高めている。	L2-② 応用的課題遂行を通じた基礎の定着
因子4 自主的学習の推奨 による主体的学習 習慣の形成 (L4)	⑬新聞や書籍、インターネット等を使って、色々な出来事やテーマについての情報を収集したり、まとめたりする宿題を出している。	L4-② 様々なメディアを用いた情報収集の実践
	⑭家庭学習として取り組ませている新聞の社説や記事、コラム等のまとめや感想を、朝の会や授業等で発表させている。	L4-① 自主的家庭学習の成果の発信の場設定
	⑮漢字や計算、英語等の自主的・継続的な家庭学習の成果を検定試験等で確かめてみることを推奨している。	L4-③ 自主的家庭学習の成果の検定での確認
	⑯子どもの習熟状況や要望に応じた宿題を用意したり、家庭学習の仕方や教材を個別に紹介したりしている。	L4-④ 個に応じた家庭学習カウンセリング

3 「授業連動力 (Link)」の 카테고리別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力の関係について

図表 3-1-16 には、前述の教師の「家庭学習指導力 (Enrich)」に準ずる形で、小学校教師 48 名を上位群・中位群・下位群の 3 群に分け、各群に属する教師が前年度担当した子どもたちの教科学力スコアおよび家庭学習力スコア (いずれも偏差値換算) の平均を示した。

なお、2008 年 11 月に刊行した「基本調査 2008」中間報告書で示した「授業連動スコアと教科学力

スコアとの関係」の図表と数値が異なっているが、本報告書では前掲の図表 3-1-15 に示した 16 項目全てをもとにカテゴリースコアを算出し直すなど集計単位を変更したことによることをここで改めて付記しておく (中間報告の図表では教科学力との間に正の相関がある 11 項目を元に集計している)。

図表 3-1-16 「授業連動力 (Link)」カテゴリー別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係 (小学校)

授業連動力 (Link) カテゴリー	教師群	授業連動力	授業連動力	授業連動力	上位-下位	検定
	子どもスコア	下位群	中位群	上位群		
L 1 予習を前提とした授業密度の向上	教 科学 力	45.4	49.8	53.6	8.2	*
	家庭学習力	51.3	49.1	52.9	1.6	
L 2 宿題の点検・確認による授業内容の定着促進	教 科学 力	47.6	48.6	57.3	9.7	**
	家庭学習力	41.9	49.7	56.3	14.4	**
L 3 応用活用的宿題による授業の深化・拡大	教 科学 力	47.9	49.5	53.0	5.0	
	家庭学習力	48.5	50.1	50.6	2.1	
L 4 自主的学習の推奨による主体的学習習慣の形成	教 科学 力	46.6	48.9	57.6	11.0	**
	家庭学習力	48.4	49.8	52.5	4.1	
授業連動力 (Link) 総合スコア	教 科学 力	46.5	48.7	56.2	9.7	**
	家庭学習力	48.9	49.1	53.3	4.3	

図表 3-1-16 からは、子どもの「教科学力」はどのカテゴリーにおいても「上位群>中位群>下位群」となり、「L 3. 応用活用的宿題による授業の深化・拡大」をのぞき、上位群と下位群間には明らかな差異が認められる。

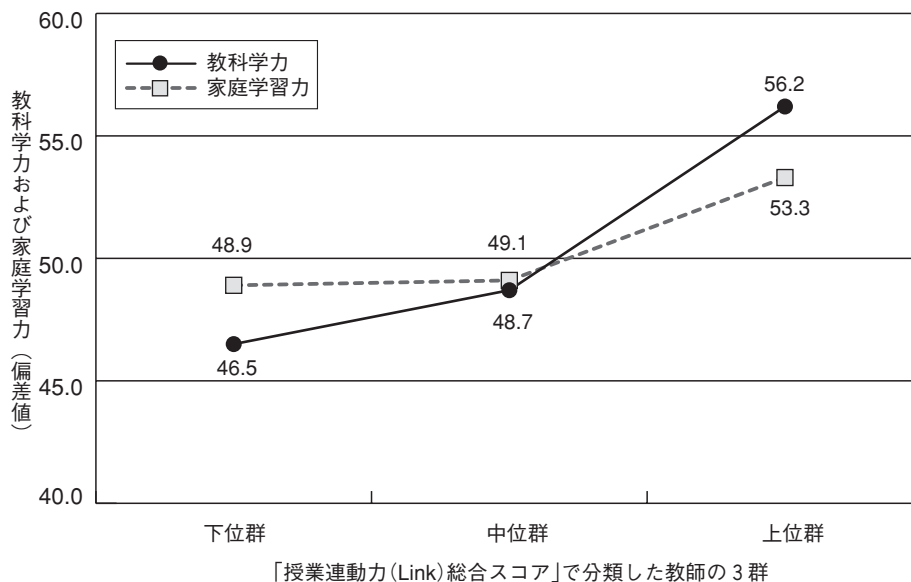
一方、家庭学習力との関係を見てみると、「L 1. 予習を前提とした授業密度の向上」をのぞき「上位群>中位群>下位群」となっているが、上位群と下位群で有意な差異がみられるカテゴリーは少なく、教科学力での差異に比べると小さくなる傾向が見られる。

また「授業連動力 (Link) 総合スコア」と子どもの教科学力および家庭学習力の関係を図表 3-1-17 にグラフで示した。この図表からは、「Link 総合スコア」が高いほど教科学力および家

庭学習力が高いという正の相関関係が読み取れる。さらに、教科学力に比べると家庭学習力に関しては相関の度合いが強いことが見て取れる。

さて、授業と家庭学習との連動に関する取り組み項目の設計にあたっては、第 2 章 1 節の構造モデルにも示したように、「教師の指導力 (F A N)」をベースとした直接的に教科学力の向上を目指す具体的な学習指導項目を中心に設定した。もう少し詳しく言うと、家庭学習指導力によって家庭学習力が育成され、家庭学習がなされたことを前提に、家庭学習の成果を授業と如何に連動させるかという観点から取り組み項目を設計した。そうした背景を勘案するとこの結果はむしろ妥当といえ、授業連動力は教科学力育成の指標として効用が認められたともいえよう。

図表 3-1-17 「授業連動力」総合スコアと教科学力および家庭学習力との関係（小学校）



注) 図表 3-1-16 最下欄の「授業連動力(Link)総合スコア」をグラフで示したものを。

なお、中学校に関する関係を図表 3-1-18 に示したが、前述の「家庭学習指導力」と教科学力および家庭学習力との関係で見たのとほぼ同様の傾向を示し、教科学力に関してはどのカテゴリーにおいても「上位群>中位群>下位群」となる

一方、家庭学習力に関してはどのカテゴリーにおいても「下位群>上位群>中位群」となるなど、今回の調査におけるクロス集計単位的设计上の課題がここにも現れている可能性がある。

図表 3-1-18 「授業連動力(Link)」カテゴリー別スコアと子どもの教科学力および家庭学習力との関係（中学校）

授業連動力 (Link)カテゴリー	教師群 子どもスコア	授業連動力	授業連動力	授業連動力	上位-下位	検定
		下位群	中位群	上位群		
L 1 予習を前提とした授業密度の向上	教 科 学 力	47.3	50.4	50.6	3.3	
	家庭学習力	54.6	48.3	54.0	-0.5	
L 2 宿題の点検・確認による授業内容の定着促進	教 科 学 力	48.1	49.9	51.9	3.8	
	家庭学習力	56.6	48.0	52.8	-3.8	
L 3 応用活用の宿題による授業の深化・拡大	教 科 学 力	44.1	49.8	55.7	11.6	+
	家庭学習力	59.5	47.1	55.3	-4.1	
L 4 自主的学習の推奨による主体的学習習慣の形成	教 科 学 力	46.7	50.4	51.0	4.4	
	家庭学習力	57.0	48.8	49.6	-7.4	
授業連動力(Link)総合スコア	教 科 学 力	46.5	49.7	53.1	6.5	
	家庭学習力	54.8	48.1	54.7	-0.1	

4 教科学力スコアと授業連動カテゴリースコアの関係について

以上、授業連動力総合スコアが子どもの教科学力育成の指標として有効となりうることを見てきた。そこで、今度は逆に子どもの教科学力が高いクラスの教師は授業と家庭学習の連動に関してどのような取り組みを行なっているのかを授業連動力の4つのカテゴリーに沿って見てみよう。

図表3-1-19は、小学5年生の前年度所属クラスにおける子どもの教科学力スコアの平均を

算出した上で偏差値換算し、各クラスを上位群・中位群・下位群に分け、各群に属するクラスを前年度担当した教師の授業連動力スコアをカテゴリー別に算出したものである。なお、各クラスの分類に際しては、クラスの教科学力スコアが60以上を上位群、40以上～60未満を中位群、40未満を下位群としている。

図表3-1-19 教科学力総合スコアと授業連動カテゴリースコアの関係(小学校)

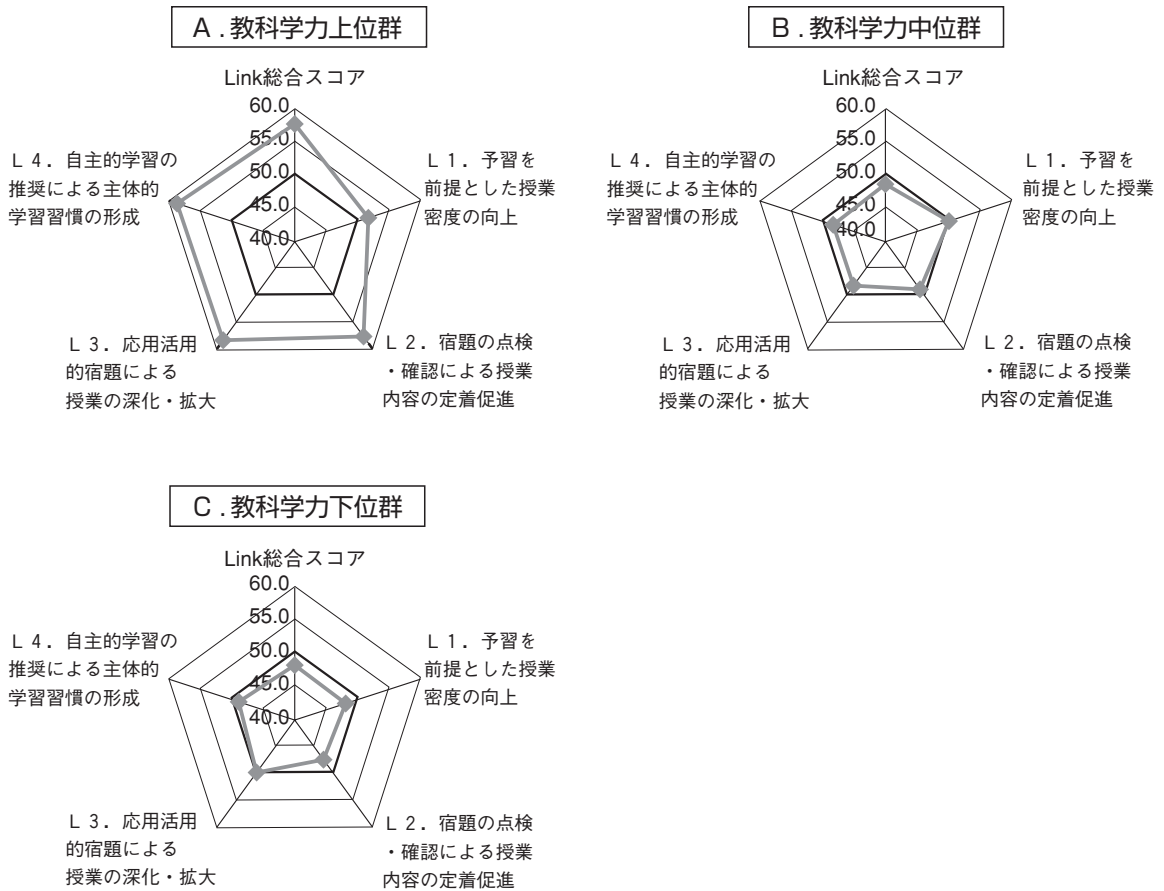
授業連動力カテゴリー	A. 授業連動力上位群	B. 授業連動力中位群	C. 授業連動力下位群	上位-下位
L 1 予習を前提とした 授業密度の向上	51.7	50.1	48.1	3.5
L 2 宿題の点検・確認による 授業内容の定着促進	57.7	48.9	47.4	10.3
L 3 応用活用的宿題による 授業の深化・拡大	58.4	48.2	49.8	8.6
L 4 自主的学習の推奨による 主体的学習習慣の形成	58.7	48.3	48.9	9.8
Link 総合スコア	57.8	48.7	48.3	9.5

図表3-1-19を見ると、明らかに教科学力の高いクラスでは教師の授業連動力スコアが高くなっていることがわかり、L1のカテゴリーを除き上位群と中位群、下位群のそれぞれの差異は統計的に有意となっている。

次に、これらの各カテゴリー別スコアの状況を

視覚的に捉えられるように、図表3-1-20に各群のレーダーチャートを示した。なお、スコアは偏差値換算されているため、50を基準として、各カテゴリースコアが50より大きい場合は相対的な「強み」を、小さい場合は「弱み」として判断できる。

図表 3-1-20 各群における授業連動力カテゴリースコアのレーダーチャート（小学校）



まず、A. 教科学力上位群について見てみると、全てのカテゴリーにおいて基準値50を超えており、4つのカテゴリーに関する取り組みが比較的バランスよくなされていることが読み取れる。なお、L1の予習関連は前述したように小学校全体に見てもあまりなされていないことがあるためか、他のカテゴリーに比べると3つの群による大きなばらつきはみられない。

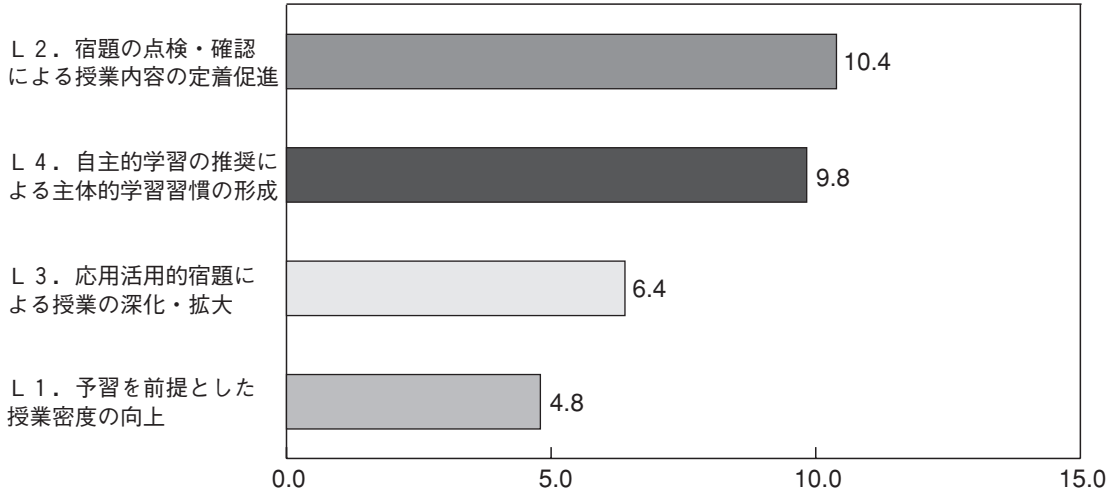
次に、B. 教科学力中位群を見ると、「L1. 予習を前提とした授業密度の向上」で基準値50を若干上回る以外はどのカテゴリーも基準値50を若干ながら下回っている。また、C. 教科学力下位群についても総合スコアでは中位群とほとんど差異はなく、上位群のみが突出した状況となっている。

さて4つのカテゴリーにおいて、上位群と下位群の差異が最も大きいものは「L2. 宿題の点検・確認による授業内容の定着促進」となっているが、実は図表3-1-21に示すように、先に

紹介した数量化Ⅰ類によってアイテムレンジを算出した結果からも子どもの教科学力に対する影響度は「L2. 宿題の点検・確認による授業内容の定着促進」に関する取り組みが最も強くなっており、この取り組みの違いが子どもの教科学力中位群と下位群を分ける上での重要なポイントとなっていると考えられる。なお、「L4. 自主的学習の推奨による主体的学習習慣の形成」についても教科学力への影響度はL2に次いで強いが、中位群と下位群間における差異は小さく、L2に比べると教科学力中位群と下位群を分ける上での重要なポイントにはなりえていない。

いずれにしろ、教科学力中位群、下位群に対しては「L2. 宿題の点検・確認による授業内容の定着促進」ならびに「L4. 自主的学習の推奨による主体的学習習慣の形成」という観点からの授業と家庭学習の連動の取り組みを一層充実・強化していくことが今後の優先的課題だといえよう。

図表 3-1-21 教科学力スコアに対する授業連動力カテゴリーの影響度 (小学校)



小学校・教科学力に対するアイテム・レンジ

4 子どもの教科学力および家庭学習力と教師の総合的な取り組みの関係について

以上、本節では①から③を通して、教師の指導力(FAN)、家庭学習指導力(Enrich)および授業連動力(Link)という3つの観点から教師の学力向上に向けた取り組みを捉え、それぞれの取り組みの違いによって、子どもの教科学力や家庭学習力がどのように異なってくるのかを探ってきた。

また、子どもたちの教科学力や家庭学習力の高いクラスとそうでないクラスでは、FAN、Enrich、Linkといった教師の力にどのような違いがあるのかを教師の取り組みをレーダーチャートによってプロフィール化することで、指標としての有効性を確認することができた。

最後に、子どもの教科学力および家庭学習力の高低のパターンによって、教師の3つの力の発揮状況がどのように異なっているかをレーダーチャートを用いて確認してみたい。

図表 3-1-22 は、小学5年生の前年度所属クラスにおける教科学力および家庭学習力の平均スコアを算出し、それぞれのスコアが平均以上を「○」、平均未満を「×」として、4つのパターンに分類したうえで、各パターンに属するクラスを前年度担当した教師のFAN総合スコア、Enrich総合スコアおよびLink総合スコアの平均(偏差値換算)を示している。

図表 3-1-22 子どもの教科学力および家庭学習力の高低パターンによる教師の3つの力の発揮状況(小学校)

パターン	A	B	C	D
教科学力	○	○	×	×
家庭学習力	○	×	○	×
FAN総合スコア	54.2	50.4	45.3	46.0
Enrich総合スコア	54.8	48.6	46.7	47.9
Link総合スコア	56.1	49.7	47.5	45.6
パターン別構成割合(%)	30.4	21.7	15.2	32.6

また、図表3-1-23では、レーダーチャートを用いて各パターンにおける教師の3つの力をプロフィール化した。

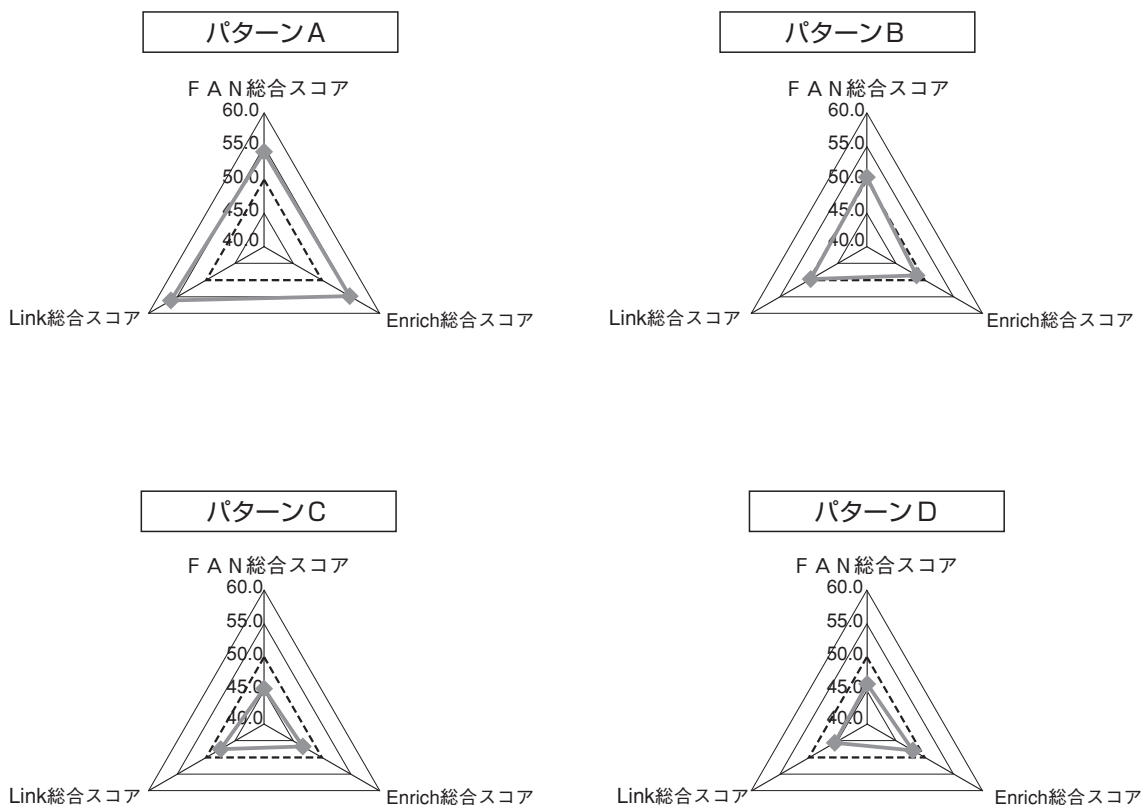
これらの図表からは、教科学力・家庭学習力ともに平均以上となるパターンで、FAN総合スコア、Enrich総合スコア、Link総合スコアはいずれも4パターン中最も高いことが見て取れ、3つの力がバランスよく、強く発揮された時に子どもの教科学力と家庭学習力がともに高くなることが読み取れる。

教科学力は平均以上だが、家庭学習力は平均未満となるパターンBでは、Enrich総合スコアに比べてFAN総合スコアの方が高くなる傾向が見られる。また、家庭学習力は平均以上だが、教科学力は平均未満となるパターンCでは、逆にFAN総合スコアに比べてEnrich総合スコアの方が

若干ながら高くなる傾向が見られ、先に見てきたFANと教科学力、Enrichと家庭学習力の関係がここでも確認できる。

なお、教科学力・家庭学習力ともに平均未満となるパターンDについては、これまで確認してきたことを踏まえれば、FAN、Enrich、Linkの3つのスコアは4パターン中最も低くなると予想されたが、実際にはFAN、Enrichの総合スコアはパターンCより高くなっている。その理由の解明については今後の課題として残されたが、パターンDにおいては、FAN(授業)とEnrich(家庭学習)を連動させる力として設定したLink(授業連動力)のスコアが4パターン中最も低くなっており、Linkのスコアの低さが媒介変数的に、FANやEnrichの影響度を弱くしているとは考えられないであろうか。

図表3-1-23 子どもの教科学力および家庭学習力の高低パターンによる教師の3つの力のプロフィール比較(小学校)



なお、詳細のデータの掲載は割愛するが、中学校においてもパターンAにおいてはFAN、Enrich、Linkの各スコアが4パターン中最も高く

なったものの、他のパターンにおいては小学校のように一定の傾向を見出すことはできなかったことを付記しておく。

参考

「子どもの家庭学習力」モデルの再構築とその活用について

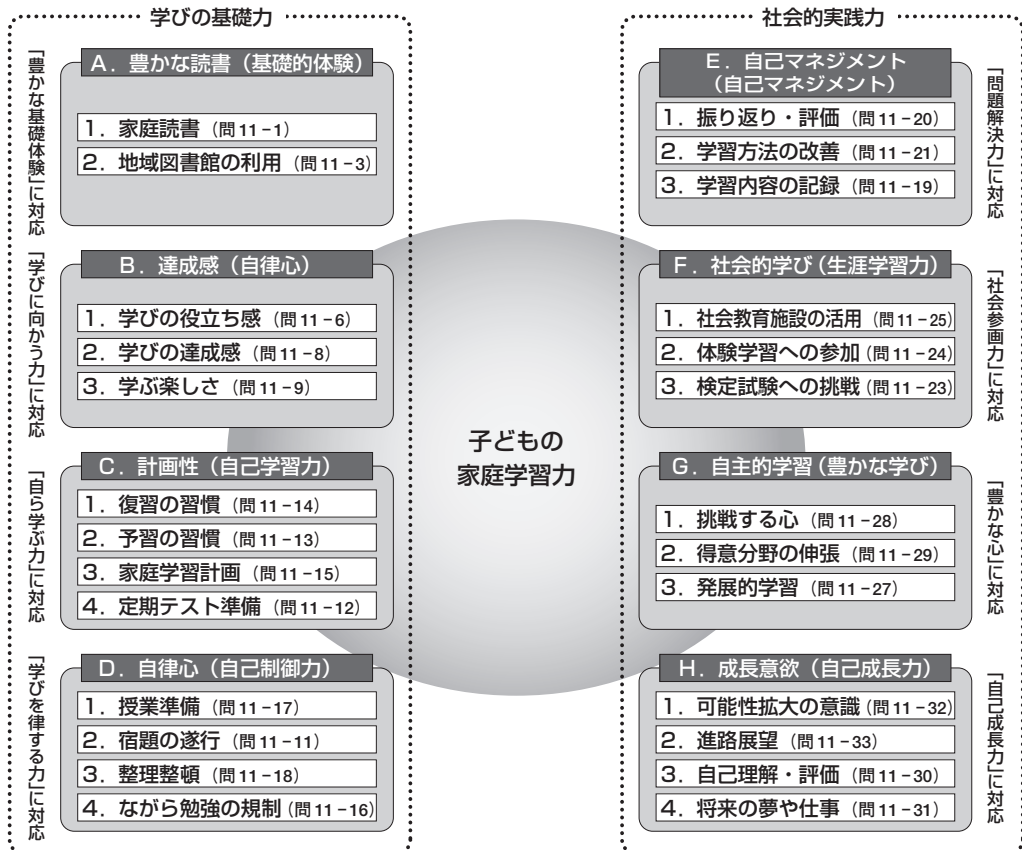
第2章3節で見たように「子どもの家庭学習力」に関わる33の項目は、いずれも教科学力との間に正の相関関係が見られた。「家庭学習力」の高い子どもほど教科学力が高く、両者における因果関係については確認されていないものの多くの教師の実感とも合致しており、「家庭学習力」の育成が教科学力向上につながるという仮説を支持するひとつの結果と考えられよう。

さて、それらの項目は第2章1節の図表2-1-2で示した「家庭学習力の構造モデル案」を踏まえて設定されたものであるが、モデルの妥当性を検証するために、改めて今回の小・中学生約7,000名の実査データに基づき因子分析を行った。

その結果を踏まえ再構築したモデルが図表3-1-24となる。なお、8つの領域名は属する下位項目の内容から改めて設定し直している。また図中の各領域名の後の()内には当初のモデル案の領域名を示し、各下位項目の後の()内には今回の子ども調査における設問番号(中学生版)を示している。

図表3-1-24に示したように、因子分析によって抽出された8つの因子ならびに各因子に属する下位項目の構造は、当初の構造モデル案で設定した領域・項目と大枠で合致しており、当初のモデル案の妥当性は確認できた。

図表3-1-24 「家庭学習力」の構造モデル改訂版

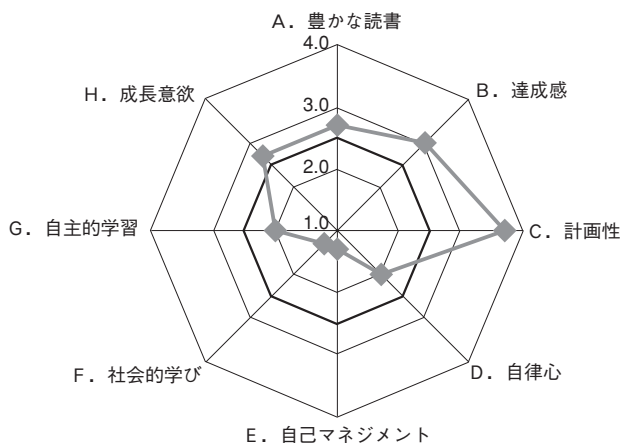


本節では、当初設定した家庭学習力の構造モデルに基づく33項目に対する子どもの回答スコアを「家庭学習力」と操作的に定義した。ただ、学校現場におけるより簡便な指標としては、ここで紹介した再構築モデルによる8領域26項目をベースに子どもの実態や学校における指導方針等を

考慮に入れ、項目数を1領域3項目程度に調整するなどして独自のチェックリストを作成されることをお勧めする。各項目に対する子どもの回答平均スコアを図表3-1-25のようなレーダーチャートに表してプロフィール分析等に活用していただければ幸いである。

図表3-1-25 「家庭学習力」の構造モデル改訂版に基づくプロフィール（ダミー）

カテゴリー	平均スコア	項目1	項目2	項目3
A. 豊かな読書	2.7	3	2	3
B. 達成感	3.0	3	3	3
C. 計画性	3.7	3	4	4
D. 自律心	2.0	3	2	1
E. 自己マネジメント	1.3	1	2	1
F. 社会的学び	1.3	2	1	1
G. 自主的学習	2.0	3	2	1
H. 成長意欲	2.7	2	4	2



- 〈プロフィール作成の手順例〉
- ①構造モデル改訂版26項目に基づき、各カテゴリーにつき3項目を設定する。
 - ②合計24項目のチェックリストを作成し、4件法で子どもの自己評価を得る。
 - ③各項目について「とてもあてはまる：4」「まああてはまる：3」「あまりあてはまらない：2」「まったくあてはまらない：1」として回答をスコア化する。
 - ④各カテゴリーについて3項目のスコアの平均を算出する。
 - ⑤8つのカテゴリーの平均スコアをレーダーチャートにプロットする。
 - ⑥「まああてはまる：3」と「あまりあてはまらない：2」の間となる2.5を基準値として、各カテゴリーのスコアについて、強み・弱みを探る。 等々